

## 動物調査結果

### 1 30年度の概要

30年度の動物の調査については、「我が国の生態系等に被害を及ぼすおそれのある外来種リスト(生態系被害防止外来種リスト)平成27年3月/環境省」に記載された、前年度と同じ25種を調査対象種として調査を行った。いずれも県内で見つかったり、あるいは発生が懸念されている種で、哺乳類5種、鳥類4種、は虫類2種、両生類2種、魚類4種、昆虫類3種、陸生節足動物3種、その他の無脊椎動物2種である。環境省のリストには国内由来の外来種等を含む229種の動物が記されている。

平成30年5～12月まで行った調査の結果は下表のとおり15種が確認され、このほか調査対象種以外の7種について報告があった。

平成30年度 外来種調査 動物対象種

通しNo.	分類群No.	分類群	和名	国内の定着段階	リスト区分等	報告件数	個体数
1	1	哺乳類	アライグマ	分布拡大期～まん延期	緊急種/特定	19	23
2	2		クリハリリス	分布拡大期～まん延期	緊急種/特定	0	0
3	3		キタリス	定着初期/限定分布	緊急種/特定	0	0
4	4		ハクビシン	分布拡大期～まん延期	重点種	5	5
5	5		マスカラット	定着初期/限定分布	重点種/特定	0	0
6	1	鳥類	ガビチョウ	分布拡大期～まん延期	重点種/特定	48	59
7	2		カオグロガビチョウ	分布拡大期～まん延期	重点種/特定	1	1
8	3		カオジロガビチョウ	分布拡大期～まん延期	重点種/特定	0	0
9	4		ソウシチョウ	分布拡大期～まん延期	重点種/特定	0	0
10	1	は虫類	カミツキガメ	分布拡大期～まん延期	重点種/特定	0	0
11	2		アカミミガメ	分布拡大期～まん延期	緊急種	31	497
12	1	両生類	ウシガエル	分布拡大期～まん延期	重点種/特定	35	223
13	2		ヌマガエル	国内由来	重点種	18	603
14	1	魚類	ブルーギル	分布拡大期～まん延期	緊急種/特定	1	2
15	2		コクチバス	分布拡大期～まん延期	緊急種/特定	1	1
16	3		オオクチバス	分布拡大期～まん延期	緊急種/特定	0	0
17	4		カダヤシ	分布拡大期～まん延期	重点種/特定	7	297
18	1	昆虫類	ホソオチョウ	分布拡大期～まん延期	重点種	2	101
19	2		アカボシゴマダラ大陸亜種	分布拡大期～まん延期	重点種	69	132
20	3		クビアカツヤカミキリ	定着初期/限定分布	その他種	1	5
21	1	陸生節足動物	ハイイロゴケグモ	分布拡大期～まん延期	緊急種/特定	0	0
22	2		セアカゴケグモ	分布拡大期～まん延期	緊急種/特定	0	0
23	3		クロゴケグモ	定着初期/限定分布	緊急種/特定	0	0
24	1	その他の無脊椎動物	アメリカザリガニ	分布拡大期～まん延期	緊急種	68	833
25	2		スクミリンゴガイ	分布拡大期～まん延期	重点種	2	2

緊急種：総合的に対策が必要な外来種の中の緊急対策外来種

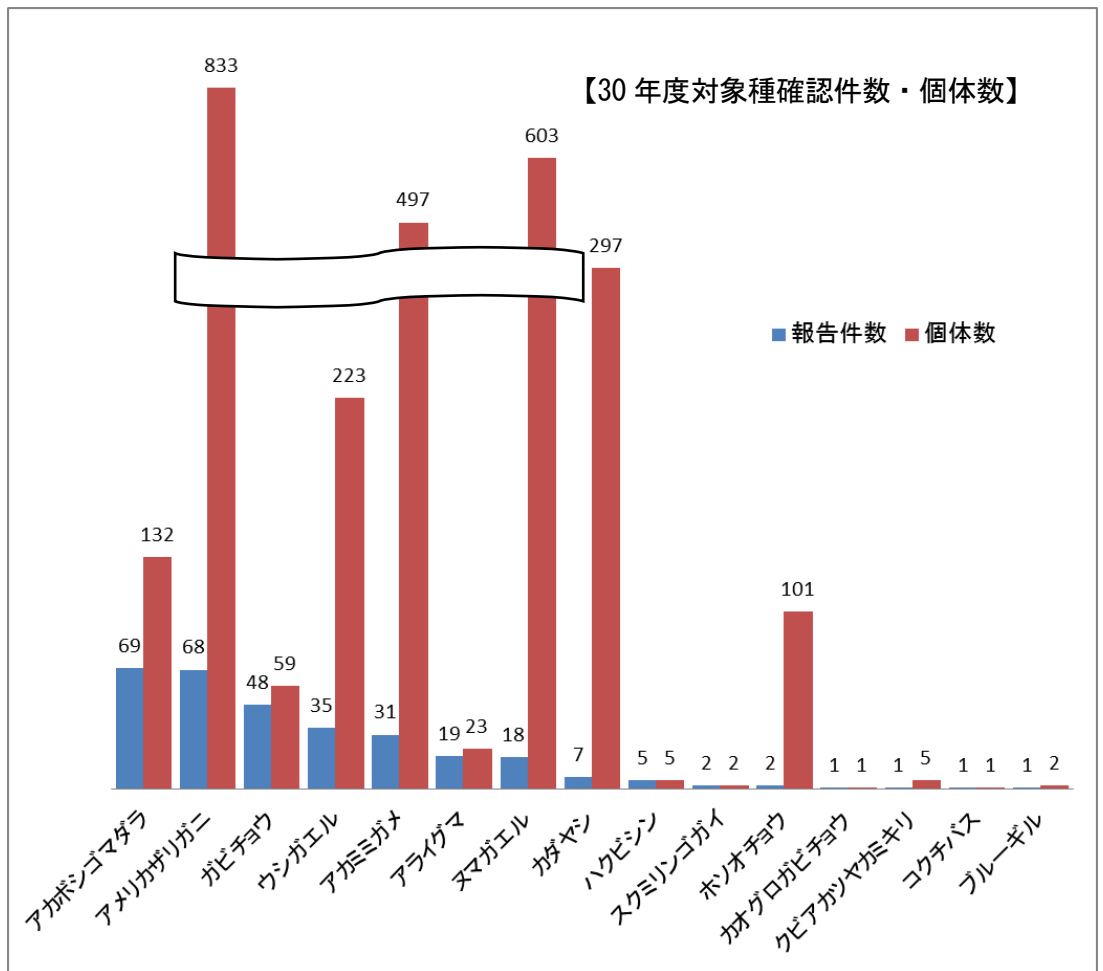
重点種：同 重点対策外来種

その他種：同 総合対策外来種

特定：外来生物法で指定された特定外来生物

## 2 30年度の状況

30年度、調査対象種15種が確認された場所は42市町村、168地点である。このうち確認の報告が最も多かったのがアカボシゴマダラ69件、次いでアメリカザリガニ68件、ガビチョウ48件、ウシガエル35件、アカミミガメ31件、アライグマ19件という順である。昨年よりガビチョウの確認数が少ないが、同種が減っているということではなく、30年度の調査地では他の種が多く確認されたという結果であろう。ちなみに28年度からの3年間を集計するとガビチョウが最も多く確認されている。



30年度確認された個体数を集計すると、アメリカザリガニ、ヌマガエル、アカミミガメの3種が他種より非常に多い。アメリカザリガニの圧倒的な多さは想像ができるが、ヌマガエルの多さには驚かされる。100匹以上を観察した場所が4か所もあった。本種は国内由来の外来種であるが、生態系被害防止外来種リストでは「生態系に係る潜在的な影響、被害が特に甚大である」とされている種である。深刻な問題として捉えるべきであろう。なお、個体数の集計にあたっては、概数で報告があるものはその概数の最少数を積算した。したがって実際の個体数はこれを上回ると思われる。

## 3 3年間の調査結果

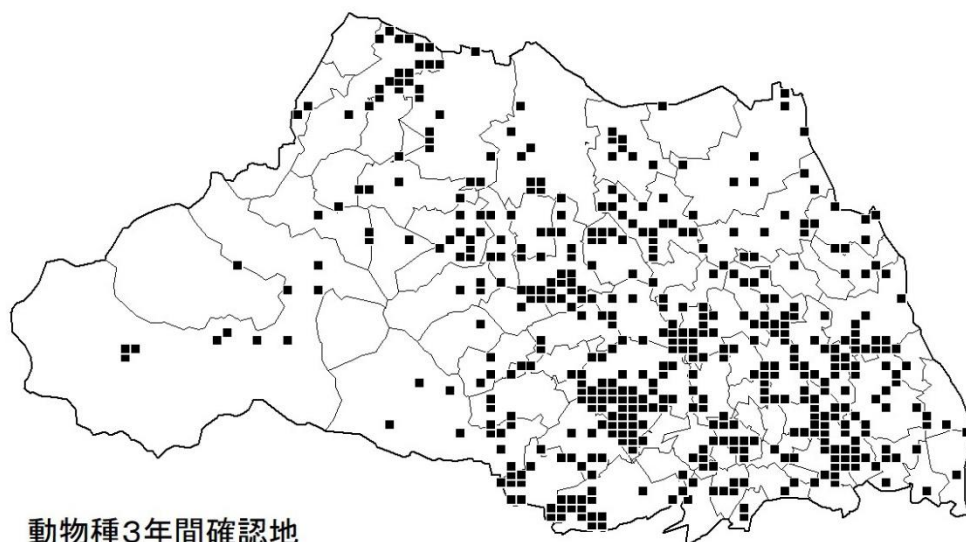
### (1) 概要

28年度～30年度の3年間に確認された外来種は32種（調査対象種19種、対象外の種13種）。哺乳類2種、鳥類8種、は虫類2種、両生類2種、魚類7種、昆虫類9種、甲殻類1種、軟体動物1種であった。調査対象外の13種の内訳は鳥類4種、魚類3種、昆虫類が6種である。対象外の種の報告は調査団体の任意になっていることから、これらの種の確認から分布を推測することはできない。

3年間に確認された種と確認件数

No.	分類	種名	調査対象種	法的扱い等	28年度	29年度	30年度	計
1	哺乳類	アライグマ	○	緊急種/特定	37	31	19	87
2	哺乳類	ハクビシン	○	重点種	16	7	5	28
3	鳥類	カビチョウ	○	重点種/特定	119	79	48	246
4	鳥類	カオグロガビチョウ	○	緊急種/特定	1	0	1	2
5	鳥類	カオジロガビチョウ	○	緊急種/特定	2	0	0	2
6	鳥類	ソウシチョウ	○	重点種/特定	2	1	0	3
7	鳥類	コウライキジ大陸産亜種		その他種	1	0	0	1
8	鳥類	コジュケイ			3	4	3	10
9	鳥類	シラコバト			0	1	0	1
10	鳥類	ワカケホンセイインコ		その他種	0	1	0	1
11	は虫類	カミツキガメ	○	緊急種/特定	1	1	0	2
12	は虫類	アカミミガメ	○	緊急種	80	57	31	168
13	両生類	ウシガエル	○	重点種/特定	98	59	35	192
14	両生類	ヌマガエル	○	重点種	29	26	18	73
15	魚類	ブルーギル	○	緊急種/特定	4	2	1	7
16	魚類	コクチバス	○	緊急種/特定	0	0	1	1
17	魚類	オオクチバス	○	緊急種/特定	2	0	0	2
18	魚類	カダヤシ	○	重点種/特定	8	8	7	23
19	魚類	カムルチー			1	1	0	2
20	魚類	グッピー		その他種	1	0	0	1
21	魚類	コイ			0	0	1	1
22	昆虫類	ホソオチョウ	○	重点種	3	2	2	7
23	昆虫類	アカボシゴマダラ大陸亜種	○	重点種	76	69	69	214
24	昆虫類	クビアカツヤカミキリ	○	その他種	2	3	1	6
25	昆虫類	アオマツムシ			0	0	2	2
26	昆虫類	アメリカシロヒトリ			0	2	9	11
27	昆虫類	キマダラカメムシ			0	0	1	1
28	昆虫類	ブタクサハムシ			0	0	1	1
29	昆虫類	ヤサイゾウムシ			0	0	5	5
30	昆虫類	ヨコヅナサシガメ			4	0	0	4
31	甲殻類	アメリカザリガニ	○	緊急種	88	65	68	221
32	軟体動物	スクミリンゴガイ	○	重点種	5	2	2	9
		計			583	421	330	1334

調査地は 58 市町村にわたった。埼玉県 63 市町村の 9 割以上にあたる。確認地点は延べ 493 か所、調査地コードで集約すると 476 地点になる。確認地の環境は、調査区分「A 雑木林」が 134 地



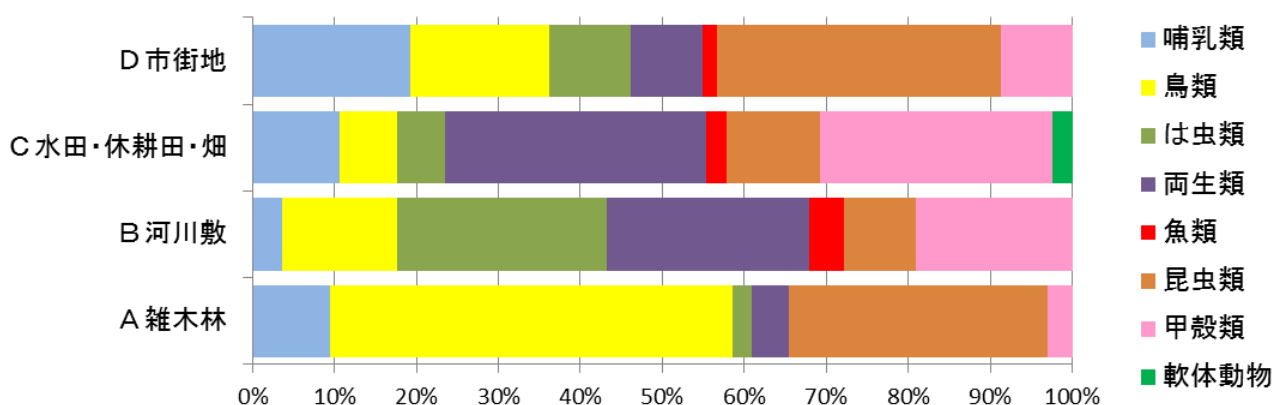
動物種3年間確認地

点、「B河川敷」201地点、「C水田・休耕地・畑」166地点、「D市街地」112地点である。その割合は「A雑木林」21.9%、「B河川敷」32.8%、「C水田・休耕地・畑」27.1%、「D市街地」18.3%であった。環境別確認地点の総数が調査地コード数を上回るのは、同一地点でも調査員により環境の判断が異なるためである。

## (2) 確認状況

### ①環境別集計結果

3年間で最も多く確認された種は、ガビチョウで246件、次いでアメリカザリガニ221件、アガボシゴマダラ214件、ウシガエル192件、アカミミガメ168件、アライグマ87件と続く。これらの種は県内に広く分布していると言われ、それを裏付ける結果となっているが、こうした結果を環境別にみると、外来種の生息状況が異なることがわかる。



上のグラフは分類ごとの確認件数(下表)を環境ごとに百分率で表したものである。これを見ると環境による確認種の構成割合がわかる。

環境区分	哺乳類	鳥類	は虫類	両生類	魚類	昆虫類	甲殻類	軟体動物	計
D市街地	33	29	17	15	3	59	15	0	171
C水田・休耕地・畑	39	26	21	117	9	42	104	9	367
B河川敷	18	69	126	121	21	43	94	0	492
A雑木林	25	129	6	12	0	83	8	0	263
計	115	253	170	265	33	227	221	9	1293

「A雑木林」では鳥類と昆虫類の割合が大きく、他の種は小さい。「B河川敷」は、は虫類や両生類の割合が他の種より大きくなっているが、その他の種は近い割合で確認されている。こうした傾向は「D市街地」も同様で、昆虫類以外は似た割合になっている。河川敷といってもそこには雑木林や耕地もあり、市街地には庭や用水路、緑地等の公園もある。そうした様々な空間が外来生物の生息地になり、結果として表われたのではないだろうか。「C水田・休耕地・畑」の耕作地では両生類と甲殻類の割合が大きく、種数が最も多く確認されている。

このように「A雑木林」より「C水田・休耕地・畑」のほうが外来種が多く確認されるという状況は、外来生物は人為的に入り市街化や近代農法などによる土地の改変にともない在来種が減少した地に定着し分布を拡大していくといわれることと符合する。様々な環境があってもそれぞれの空間の生物多様性が低ければ、近縁の種より競争力、繁殖力が強い外来生物はその空間に侵入し、天敵や競争相手のいない場所でまん延する。まさに侵略的といわれる所以はここにある。環境別の集計からはそ

うした状況も垣間見える。

②自治体別集計結果

確認された種を自治体別に集計したものが動物8～10ページの表である。外来種の駆除等の対策を直接担うのは各自治体になると思われることから、市町村ごとにどのような種が確認されたかを記した。右表は、そのうち6種以上が確認された市と町を記したものである。最も多くの種が確認されたのが、さいたま市の13種、次いで川口市10種、上尾市9種、鴻巣市・所沢市・飯能市・美里町がそれぞれ8種、小川町・桶川市・加須市・川越市・坂戸市・志木市・東松山市がそれぞれ7種であった。

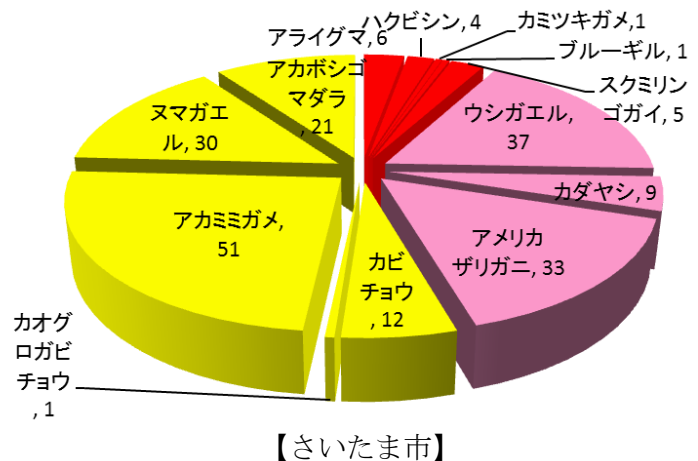
市町村名	地点数	種数
さいたま市	71	13
川口市	32	10
上尾市	17	9
鴻巣市	16	8
所沢市	17	8
飯能市	11	8
美里町	4	8
小川町	10	7
桶川市	6	7
加須市	8	7
川越市	52	7
坂戸市	11	7
志木市	5	7
東松山市	21	7
川島町	5	6
行田市	8	6
狭山市	12	6
草加市	6	6
鳩山町	6	6
深谷市	11	6
吉見町	7	6

確認種数と確認地点数を併せてみると、最も多くの確認報告があったさいたま市では71地点で13種が記録され、他市町村の確認地や種数を圧倒している。こうした結果は、さいたま市に外来種が特に多いという評価ではなく、同市域の調査に多くの調査員があたり、きめこまかく調査された、その結果と考えるべきであろう。

反対に、確認地点数が最も少ない美里町は、わずか4地点で8種も確認されている。同様に確認地が少ないのに多くの種が見つかったのが、志木市5地点・7種、桶川市6地点・7種、加須市8地点・7種であった。これらの市町をさらに広く調べると種数が増えるか否か、判断は難しい。ただ、県内に広く分布するとみられる6種（ガビチョウ・アカミミガメ・ウシガエル・アカボシゴマダラ・アメリカザリガニ・アライグマ）の多くが、これらの市町ですでに確認されていることから、調査地を増やしても種数が大きく増えることはないかもしれない。

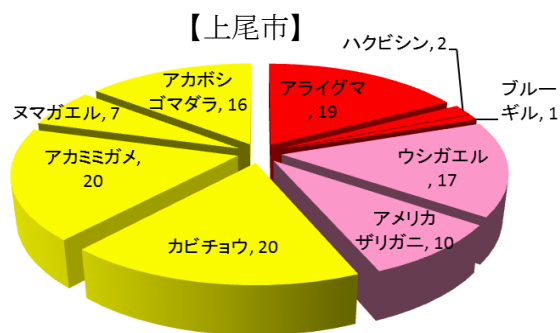
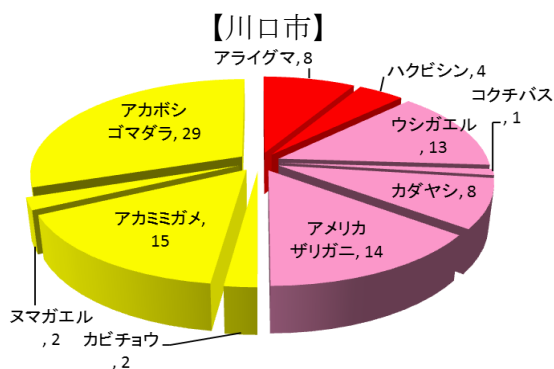
6種以上確認された自治体のうち、見つかった種と確認件数を生態系被害防止外来種リストの「対策優先度の要件」にわけて、その構成割合を見たのが、以下の円グラフ（さいたま市の例）である。

「赤」で示した領域は、同リストで被害の深深刻度④（人の生命・身体や農林水産業等社会経済に対して甚大な被害を及ぼす）に該当する種。「桃色」の領域は同深深刻度③（絶滅危惧種等の生息・生育に甚大な被害を及ぼす可能性が高い）に該当する種。「黄色」の領域は同深深刻度①（生態系に係る潜在的な影響・被害が特に甚大である）に該当する種などである。

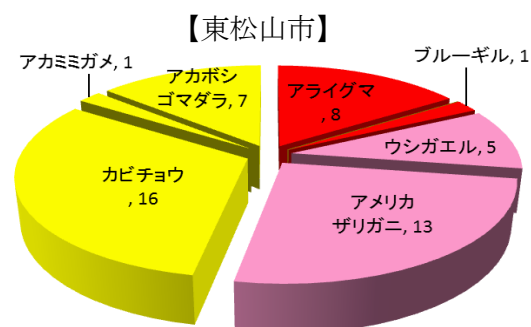
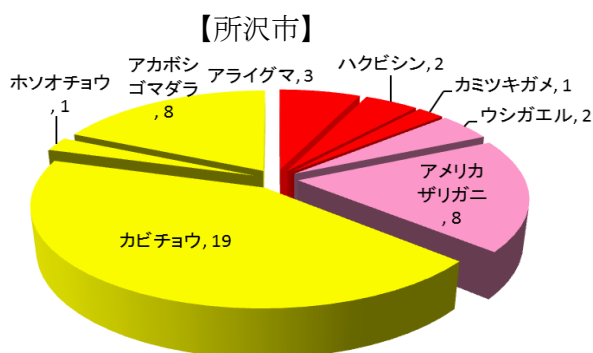


以下、自治体ごとの傾向をみるため、市域が、地帯区分の「低地帯」に入る市から川口市と上尾市、低地帯と台地・丘陵帯を含む市から所沢市と東松山市、台地・丘陵帯と低山帯を含む市町から飯能市と美里町を抽出し表した。

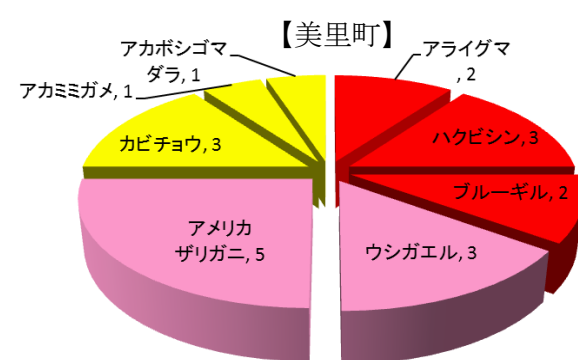
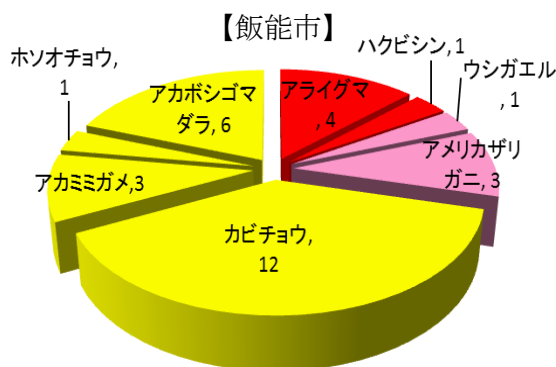




川口市と上尾市との比較では、「赤」の領域「人の生命・身体や農林水産業等社会経済に対して甚大な被害を及ぼす」種の割合が、上尾市のほうが大きいことが分かる。



所沢市と東松山市との比較では、「赤」の領域「人の生命・身体や農林水産業等社会経済に対して甚大な被害を及ぼす」種の割合は同程度であるが、種数は所沢市のほうが多い。一方、「桃色」の領域「絶滅危惧種等の生息・生育に甚大な被害を及ぼす可能性が高い」種の割合は、東松山市の方が大きい。同市が所沢市より水田などの耕地が多いことによる結果と思われる。



飯能市と美里町との比較では、どちらも8種確認されているが、「黄色」の領域「生態系に係る潜在的な影響・被害が特に甚大である」種の割合が、飯能市のほうが断然大きい。一方、美里町は、「桃色」の領域「絶滅危惧種等の生息・生育に甚大な被害を及ぼす可能性が高い」種の割合が大きく、同町が飯能市より水田などの耕地が多いことがうかがえる。

以上のとおり、確認された種数が同程度でも、また地理的に似た自治体であっても外来種の様相は異なるようである。こうしたことから外来生物の対策にあたっては、外来生物に関する最新の知見と

ともに市町村のさらなる調査、住民への啓発、地域の土地利用に応じた検討が必要になると思われる。

下に、先に記した6種以上確認された自治体の、種ごとの確認件数を「対策優先度の要件（生態系被害防止外来種リスト）」に分けて表にした。①は、生態系に係る潜在的な影響・被害が特に甚大である、に該当する種。②は、生物多様性保全上重要な地域に侵入・定着し被害をもたらす可能性が高い種。③は、絶滅危惧種等の生息・生育に甚大な被害を及ぼす可能性が高い種。④は、人の生命・身体や農林水産業等社会経済に対して甚大な被害を及ぼす、に該当する種である。外来生物が「多いとか少ない」といった評価だけでなく、被害の深刻度と合わせてみていただければ幸いである。

なお、クビアカツヤカミキリについては、生態系被害防止外来種リストの作成時には情報不足だったためか、対策優先度の評価要件は「未評価」となっているが、被害の状況から考えると「人の生命・身体や農林水産業等社会経済に対して甚大な被害を及ぼす」種に相当すると思われるので、注意を要する。

分類	哺乳類		は虫類	魚類		軟体動物	両生類	魚類		甲殻類	鳥類				は虫類	両生類	昆虫類		確認種数	
	種名	種名	種名	種名	種名	種名	種名	種名	種名	種名	種名	種名	種名	種名	種名	種名	種名			
種名	アライグマ ①②③④	ハウビシン ①④	カミツキガメ ①④	ブルーギル ①②③④	オオクチバス ①②③④	スクミリンゴガイ ④	ウシガエル ①③	コクチバス ①②③	カダヤシ ①③	アメリカザリガニ ①③	カビチョウ ①	カオグロガビチョウ ①	カオジロガビチョウ ①	ソウシチョウ ①	アカミガメ ①	ヌマガエル ①	ホソオチョウ ①	アカボシゴマダラ大陸種 ①	クビアカツヤカミキリ	
自治体名																				
さいたま市	6	4	1	1		5	37		9	33	12	1			51	30		21		13
川口市	8	4					13	1	8	14	2				15	2		29		10
上尾市	19	2		1			17			10	20				20	7		16		9
鴻巣市	3					3	5			9	3				3	7		4		8
所沢市	3	2	1				2			8	19						1	8		8
飯能市	4	1					1			3	12				3		1	6		8
美里町	2	3		2			3			5	3				1			1		8
小川町	3						5			4	8				1		1	1		7
桶川市		1					4			3	1				1	2		6		7
加須市						1	3		1	1			1			3		1		7
川越市	6						4			28	17				10	2		44		7
坂戸市	6	1								2	9	1			1		1			7
志木市		1			1		1		2	3					3			6		7
東松山市	8			1			5			13	16				1			7		7
川島町	3						1			2	2				4			1		6
行田市	1			1			2			2					1	2				6
狭山市	1	1								2	11				1			5		6
草加市							3		3	1					2			1	5	6
鳩山町	1						2			1	5			1				2		6
深谷市	1	2								9	6							1	1	6
吉見町	4						6				16				7	8		9		6

市町村名No.三五十音順 確認地点数三メツシユコード数

No.	市町村名	確認 地点数	確認 種数	哺乳類		鳥類			は虫類		両生類		魚類			昆虫類		甲殻 類	軟体 動物	
				アライ グマ	ハクビ シン	カビ チヨウ	カオグ ロガビ チヨウ	カオジ ロガビ チヨウ	ソウシ チヨウ	カミツ キガメ	アカミ ミガメ	ウシ ガエル	ヌマガ エル	ブル ギル	コクチ バス	オオク チバス	カダヤ シ			ホソオ チヨウ
1	上尾市	17	9	0	0	0				0	0	0			0		0			
2	朝霞市	5	4							0	0				0		0		0	
3	伊奈町	4	5			0				0	0				0		0		0	
4	入間市	12	5			0		0		0					0		0		0	
5	小鹿野町	1	1			0														
6	小川町	10	7	0		0				0	0				0		0		0	
7	桶川市	6	7	0		0				0	0				0		0		0	
8	越生町	1	2			0														
9	春日部市	11	5							0	0			0		0		0		0
10	加須市	8	7					0			0			0		0		0		0
11	神川町	2	1			0														
12	川口市	32	10	0	0	0				0	0		0		0		0		0	
13	川越市	52	7	0		0				0	0				0		0		0	
14	川島町	5	6	0		0				0	0				0		0		0	
15	北本市	1	3		0	0														
16	行田市	8	6	0						0	0								0	
17	久喜市	10	5							0	0				0				0	
18	熊谷市	8	4			0													0	
19	鴻巣市	16	8	0		0				0	0				0		0		0	0
20	越谷市	14	5							0	0				0		0		0	0



市町村名No.二五十音順 確認地点数ニメツシユコード数

No.	市町村名	確認 地点数	確認 種数	哺乳類		鳥類			は虫類		両生類		魚類			昆虫類		甲殻 類	軟体 動物	
				アライ グマ	ハクビ シン	カオビ チョウ	カオグ ロガビ チョウ	カオジ ロガビ チョウ	ソウシ チョウ	カミツ キガメ	アカミ ミガメ	ウシ ガエル	ヌマガ エル	ブル ギル	コクチ バス	オオク チバ ス	カダヤ シ			ホソオ チョウ
21	さいたま市	71	13	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
22	坂戸市	11	7	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
23	幸手市	4	3																	
24	狭山市	12	6	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
25	志木市	5	7		0										0	0	0	0	0	0
26	白岡市	4	3																	
27	杉戸町	4	5	0																0
28	草加市	6	6																	0
29	秩父市	10	4	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
30	鶴ヶ島市	1	2																	
31	ときがわ町	3	3																	0
32	所沢市	17	8	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
33	戸田市	2	2		0															
34	長瀨町	1	2																	
35	滑川町	4	5	0																0
36	新座市	2	1																	0
37	蓮田市	10	4	0																0
38	鳩山町	6	6	0																0
39	飯能市	11	8	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
40	東秩父村	3	2																	

市町村名No.＝五十音順 確認地点数＝メッシュコード数

No.	市町村名	確認地点数	確認種数	哺乳類		鳥類				は虫類		両生類		魚類				昆虫類		甲殻類	軟体動物	
				アライグマ	ハクビシン	カビチヨウ	カオグロガビチヨウ	カオジロガビチヨウ	ソウシチヨウ	カミツキガメ	アカミミガメ	ウシガエル	ヌマガエル	ブルーギル	コクチバス	オオクチバス	カダヤシ	ホソオチヨウ	アカボシゴマダラ大陸亜種			クビアカツヤカミキリ
41	東松山市	21	7	0		0				0					0				0			
42	日高市	3	3	0	0											0						
43	深谷市	11	6	0	0	0												0		0		
44	富士見市	2	1																	0		
45	本庄市	15	5			0					0									0		
46	松伏町	1	3								0	0										
47	三郷市	2	3								0	0								0		
48	美里町	4	8	0	0	0					0	0							0		0	
49	皆野町	1	1			0																
50	宮代町	1	1	0																		
51	三芳町	1	2																	0		
52	毛呂山町	4	4			0													0			
53	八潮市	1	2								0											
54	吉川市	1	3								0	0								0		
55	吉見町	7	6	0		0					0	0										
56	寄居町	4	2	0		0																
57	嵐山町	4	5			0													0		0	
58	和光市	1	1			0																

### ③種別集計結果

28年度～30年度の3年間に確認された外来種は、先に記したとおり32種（調査対象種19種、対象外の種13種）であった。種ごとの状況は動物12ページ以降に、また本調査と異なる形で調べたクビアカツヤカミキリの結果についてはその後に記した。ここでは確認された種を分類群ごとにみている。

哺乳類ではアライグマとハクビシン、両種とも毎年確認の報告が寄せられた。アライグマの確認は多く、3年間で87件になった。しかも生体の目撃情報が3割もあり、明るい時間帯にも活動していることを伺わせている。ハクビシンは市街地での確認が多く、都市化された環境に進出、分布を広げている可能性を示す結果となっている。いずれも人や在来小動物への影響、農業被害をもたらすことから対策や駆除が行われているが、依然被害が続いているようである。

鳥類についてはガビチョウの確認が非常に多い。今回の調査の動物種の中で最も多い確認件数になり、3年間で246件となった。カオグロガビチョウやカオジロガビチョウ、ソウシチョウも少数だが確認された。ガビチョウのニッチ（生態的地位）は里山の藪といわれているが、同様の空間が県内各地にあり、分布を広げていることがうかがえる。

は虫類ではアカミミガメの確認が圧倒的に多く、3年間で168件になった。河川敷での確認が多くを占めるが、公園の池やため池といった止水域からの報告もあり、まさに人為による侵入、定着を裏付けている。

両生類についてはウシガエルの確認が192件（幼生1を含む）、ヌマガエルの確認が73件。両種とも3年間でよく確認された。ウシガエルは特定外来種に指定され全国で問題となっている。一方ヌマガエルは国内由来の外来種とされ、近年関東地方での分布拡大が心配されている。今回の調査の結果は、利根川・荒川の両流域での定着を推測させ、専門的な調査を早急に行う必要を感じさせている。

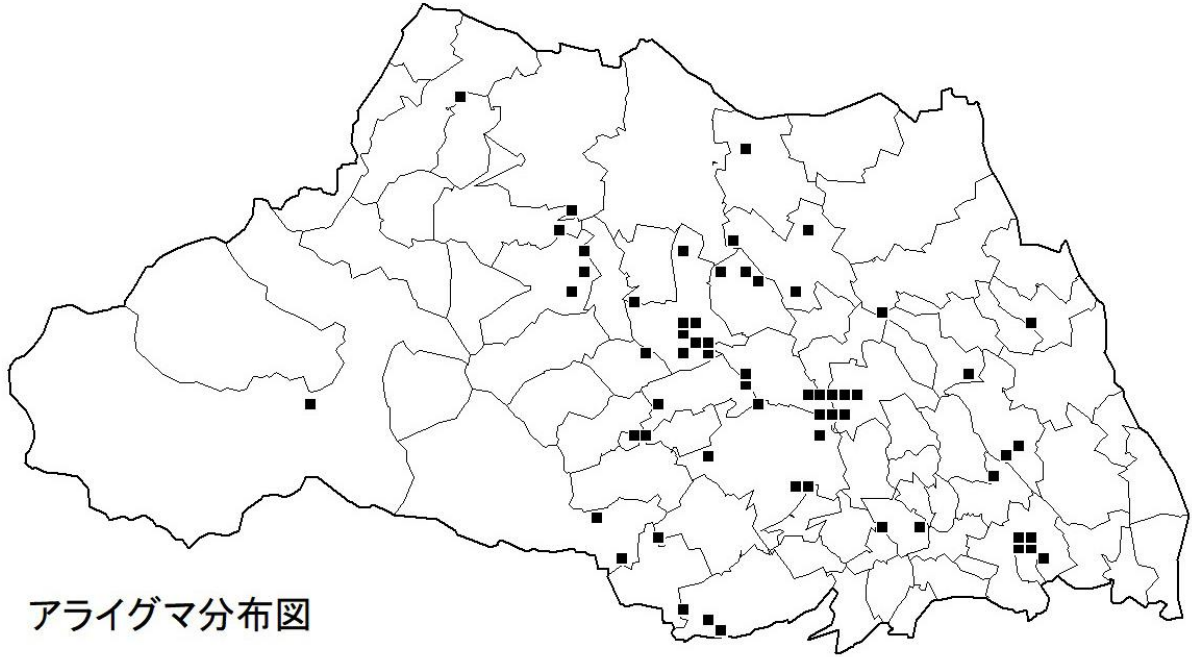
魚類は、確認数は少ないがブルーギル、コクチバス、オオクチバス、カダヤシの4調査対象種すべてが報告された。これらの種は、広く定着し分布を拡大していることは知られている。今回の調査では公園の池での確認報告もある。止水域であれば駆除は比較的容易である。行政の積極的な取り組みを期待する調査結果ともいえよう。

昆虫類についてはアカボシゴマダラの確認が最も多く、3年間で214件になった。アメリカザリガニの確認件数に匹敵する。ホソチョウの確認地も増え、3年間で6市町・7件確認された。これらの種は農業被害をもたらさないことから駆除されることなく分布を広げていると思われる。クビアカツヤカミキリについては、県内では新たな確認も報告され、行政の取り組みもはじまっている。継続的な対策が求められる。

甲殻類・アメリカザリガニの確認の報告は3年間で221件あった。適応力が高く、雑食性が強いこともあって分布を拡大、現在に至っている。水生小動物への直接加害といった影響とともにサギ類等の野鳥やアライグマが捕食していることから生物間の相互作用の変化や生態系への影響も考えられる。公園の池や小さなため池であれば駆除は可能である。子どもでも接しやすい外来生物であるが、安易な取り扱いには避けるべきであろう。

軟体動物・スクミリンゴガイは3年間で9件報告があった。稲も食害するなど農業被害をもたらすことから対策法も記されているが、分布を広げている。この調査では確認件数は少ないものの見つかる個体数が多い。旺盛な繁殖力をもつことから、早急に対策が必要な状況になっていることが伺える。

1 アライグマ(アライグマ科) *Procyon lotor* 特定外来生物 ・ 緊急対策外来種



アライグマ分布図



**分布状況**

30年度は10市町、19件の報告があった。  
28年度～30年度、3年間の報告件数は、22市町87件になる。確認地は分布図のとおりである。報告のなかった県中央部の戸田、蕨、鳩ヶ谷市や西部の朝霞、志木、和光、新座市などは埼玉県捕獲数調査でも捕獲数の記録がないか極めて少ない地域なので、今回の調査結果は、本種の現在の分布状況を反映していると思われる。

環境別報告件数	記号	件数	%
雑木林	A	16	18.4
河川敷	B	17	19.5
水田・休耕田・畑	C	35	40.2
市街地	D	19	21.8
合計		87	100

**環境別報告件数**

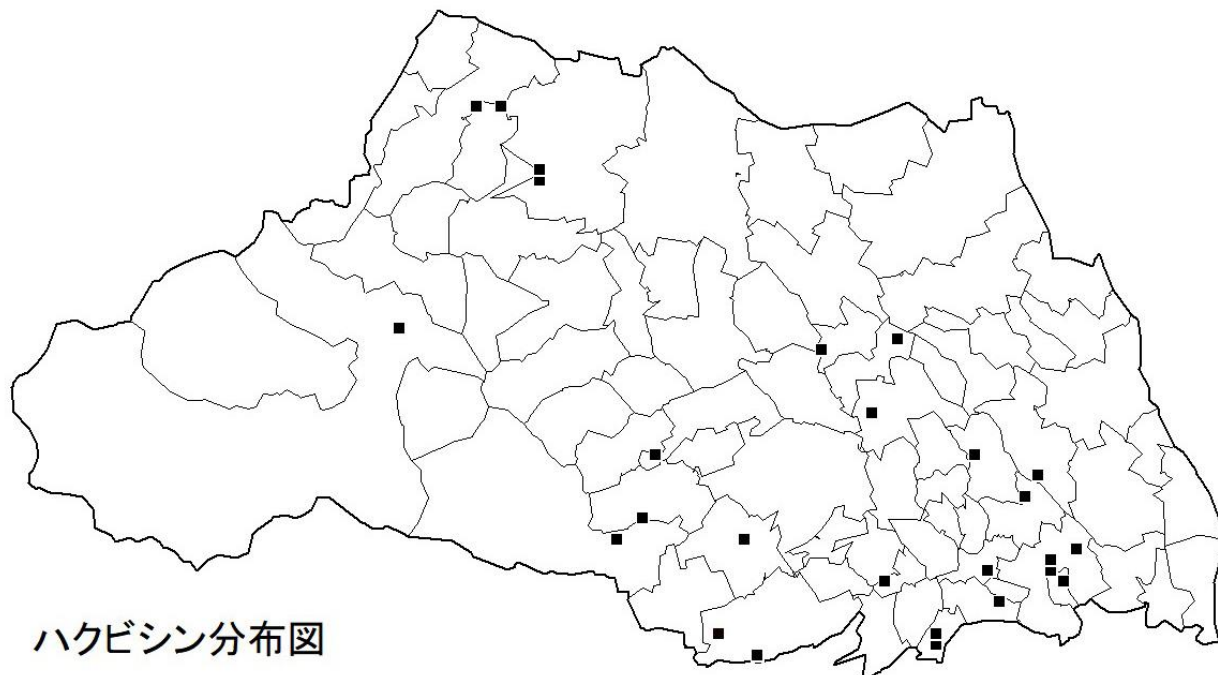
30年度の報告を環境別にみると、A雑木林1件、B河川敷5件、C水田等10件、D市街地3件であった。

3年間の環境別報告件数を見ると、水田・休耕田・畑からの報告件数が最も多く、次いで市街地からの報告が多かった。足跡や爪痕などの生活痕による確認数が大多数を占めており、水田、河川敷の他に雑木林や市街地でも足跡が確認されている。アライグマの生態特性として河川や水路を移動することや水辺周辺で餌を捕ることが多いことが反映されている。また、生体の目撃情報が3割近く寄せられており、明るい時間帯にも活動していることが伺える。

**種の概要**

北米原産のペット由来の外来種。外来生物法（環境省：2004年）により特定外来生物に指定されている。埼玉県県内で目撃されるようになったのは2000年頃からである。2007年より埼玉県「アライグマ防除計画」に基づき計画的な防除対策（計画捕獲）が実施されている。尾のしま模様と目の周りの黒模様が両目につながっているのが特徴である。自然の状態では木のウロなどで繁殖するが、家屋の屋根裏でも繁殖する。在来のタヌキやキツネ、イタチなどと競合し、また、カエル類やトウキョウサンショウウオなどの両生類やフクロウ、サギ類などの鳥類にも影響を与えている可能性が高い。

2 ハクビシン(ジャコウネコ科) *Paguma larvata* 緊急対策外来種



ハクビシン分布図



**分布状況**

30年度は2市から、5件の報告があった。

28年度～30年度、3年間の報告件数は、16市町から28件になる。アライグマに比べて報告件数は少ないが、分布状況は重なる地点が多く県西、県南からの報告が多かった。

**環境別報告件数**

30年度の報告を環境別にみると、A雑木林1件、C水田等1件、D市街地の5件で、河川敷からの報告はなかった。

環境別報告件数	記号	件数	%
雑木林	A	9	32.1
河川敷	B	1	3.6
水田・休耕地・畑	C	4	14.3
市街地	D	14	50
合計		28	100

3年間の環境別報告件数を見ると、市街地からの報告が半数を占め、本種が都市化された環境に適応して進出している現況が伺える。近年、都内の

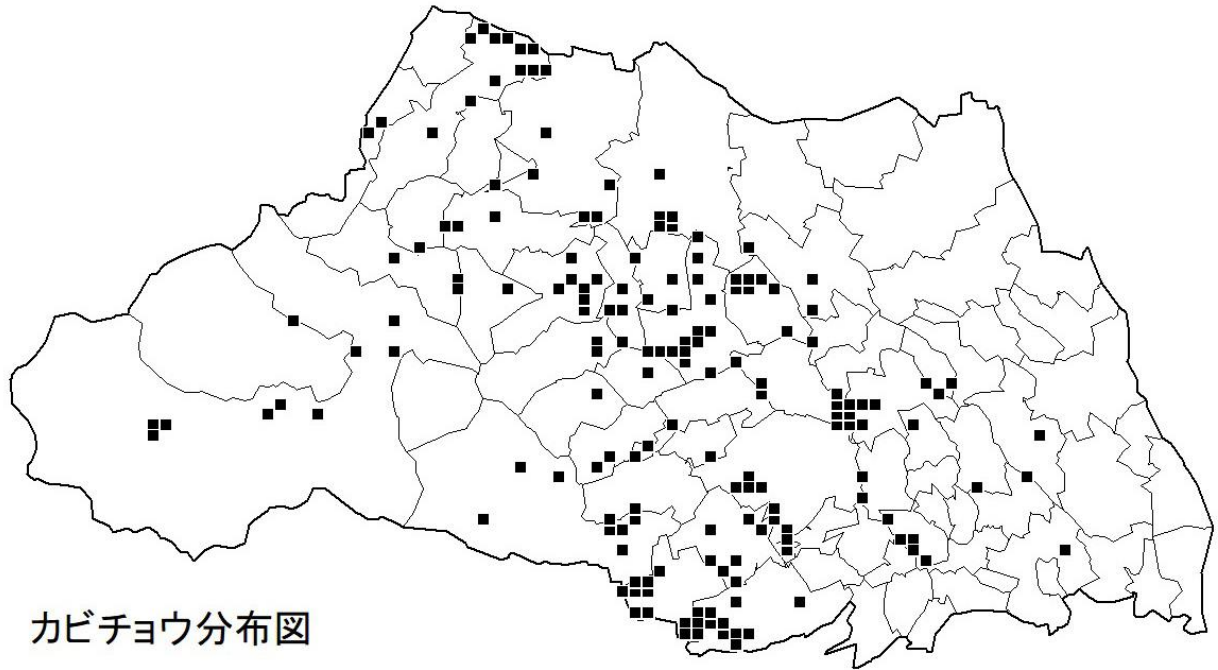
ビル街で電線を渡るハクビシンの目撃情報が増えていると言われているが、今回の調査でも民家の屋根や学校のフェンスの上などを歩く姿が目撃されている。

**種の概要**

日本で唯一のジャコウネコ科の哺乳類。額から鼻先まで白い模様が入る。本来は樹上生活者でバランス感覚は非常に優れている。近年、民家の屋根裏や軒下などにも棲みつことが多く、市街地で増加している。ハクビシンは雑食性で野鳥や昆虫の他、ブドウ、ナシなどの果樹やトウモロコシやトマトなどの野菜も好み、農作物被害が増えている。埼玉県では、1978年に名栗村で交通事故にあって死亡したものが最初の記録である。青梅市側から埼玉県内に侵入し、秩父地域を中心に分布を拡大したようである。その後、県内全域で生息が確認されるようになった。



3 ガビチョウ(チメドリ科) *Garrulax conorus* 特定外来生物・緊急対策外来種



**分布状況**

30年度は19市町、48件の報告があった。  
 28年度～30年度、3年間の報告件数は246件になる。確認地は分布図のとおりである。これらの報告には、県南東部から北部にかけての低地帯からの確認情報がほとんどない。これは、他地域に比べてガビチョウの好む雑木林が少ないためと考えられる。  
 なお調査期間外に見沼区で見ているので、冬期の動向が気にかかる場所である。

環境別報告件数	記号	件数	%
雑木林	A	126	51.2
河川敷	B	66	26.8
水田・休耕田・畑	C	26	10.6
市街地	D	28	11.4
合計		246	100

**環境別報告件数**

30年度の報告を環境別にみると、A雑木林26件、B河川敷8件、C水田等8件、D市街地6件であった。

3年間の環境別報告件数を見ると、圧倒的に雑木林からのものが多い。また、河川敷の樹林地にもか

なり生息していることが推測される。さらに市街地からの確認情報もあり、県内各地に分布していることがうかがえる。

**種の概要**

東南アジア原産のペット由来の外来種である。「江戸時代から輸入の記録がある」とされている。下層植生の発達した林に生息。クロツグミ、キビタキ、オオルリ、サンコウチョウなどの囀りをまねることもあり、夏期は注意を要する。国内では南東北と西関東から中部にかけての範囲と九州北部に分布。県内では10年ほど前から急激に目撃情報が増えている。「外来種ハンドブック」(日本生態学会, 2002)によると、里山の放置による藪の増加がガビチョウに好適な生息場所を増加させたとしている。



4 カオジロガビチョウ（チメドリ科） *Garrulax perspicillatus* 特定外来生物・緊急対策外来種



カオジロガビチョウ分布図



**分布状況**

30年度はさいたま市緑区で確認された。もう1件は、28年度の坂戸市での記録である。ガビチョウに比べると県内での分布は広がっていないように思われる。

調査とは別に平成26年4月に、坂戸市浅羽ビオトープで見たことがあるが、最近は見ることができない。比企丘陵でも5, 6年前の記録を散見することができる。

環境別報告件数	記号	件数	%
雑木林	A	0	0
河川敷	B	1	50
水田・休耕田・畑	C	0	0
市街地	D	1	50
合計		2	100

**環境別報告件数**

ガビチョウ、カオジロガビチョウと同様に藪を好む傾向がある。坂戸市浅羽ビオトープの記録は河川敷内の笹藪で見られたものである。当時はガビチョウと共存していたが、現在はガビチョウしか見られない。

**種の概要**

東南アジア原産のペット由来の外来種である。1980年頃から神奈川県で鳴き声が聞かれており、1988年に三浦半島で初めて観察された。埼玉県での記録も1980年代からと思われる。顔が黒くガビチョウやカオジロガビチョウに比べると一回り大きい。体色もガビチョウの茶褐色とは異なり灰褐色である。国内では、岩手、群馬、埼玉、東京、神奈川で確認されている。飼い鳥が逃げ出して野生化したものと考えられている。

5 カオジロガビチョウ（チメドリ科） *Garrulax sannio* 特定外来生物・緊急対策外来種



カオジロガビチョウ分布図



分布の状況

30年度に報告はなかった。

平成28年7月に本庄市の利根川河川敷内の樹林地からの報告と、11月に加須市渡良瀬遊水地内河川敷沿いの植え込みからの報告があった。渡良瀬遊水地内では、現在でも見られており、写真は同地でシラカシのドングリをくわえているところである。

群馬県で多く報告されており、埼玉県内でも北部からの情報がある。今後埼玉県内に徐々に侵入するおそれがある。ガビチョウに似るが声は異なる。

環境別報告件数	記号	件数	%
雑木林	A	0	0
河川敷	B	2	100
水田・休耕田・畑	C	0	0
市街地	D	0	0
合計		2	100

環境別報告件数

環境別報告件数は上記のとおり、河川敷からの2件だけであった。

種の概要

東南アジア原産のペット由来の外来種で、外来生物法による特定外来生物に指定されている。ガビチョウ同様に藪や下層植生の発達した林に生息している。ガビチョウとほぼ同じ大きさで体色は茶褐色、頬が白いのが特徴である。

1994年に群馬県赤城山の南面で確認され、その後分布を徐々に広げ、現在は北関東から千葉県にかけて生息している。県内では、2010年頃から目撃情報が増えている。上野町、加須市、深谷市、熊谷市、行田市、北本市の記録もある。

6 ソウシチョウ(チドリ科) *Leiothrix lutea* 特定外来生物・緊急対策外来種



ソウシチョウ分布図



分布状況

30年度に報告はなく、平成28年9月に入間市、11月に鳩山町からの報告があった。平成29年6月には入間市からの報告があった。

調査期間外ではあるが、平成29年1月に大麻生野鳥公園でも確認しており、ここでは、現在も見ることができる。

冬期には標高の低い竹林や笹藪などに移動してくるようで、以前、東松山市や岩槻区の雑木林内で小さな群れになっているのを観察したことがあるが、最近は見られない。

環境別報告件数	記号	件数	%
雑木林	A	3	100
河川敷	B	0	0
水田・休耕地・畑	C	0	0
市街地	D	0	0
合計		3	100

環境別報告件数

環境別報告件数は雑木林からのものだけであった。本種は藪を好むことから、確認地周辺は手の入っていない樹林地であることが推測される。

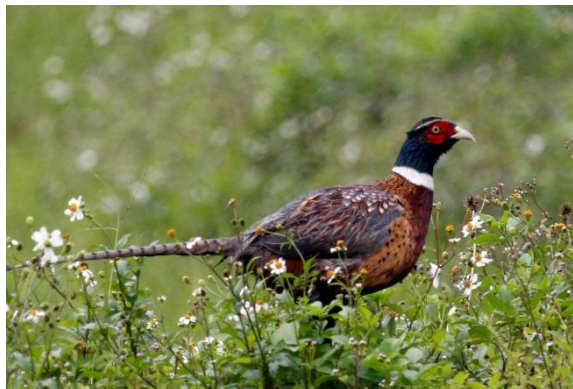
種の概要

東南アジアから中国南部、ヒマラヤ西部にかけて分布する。スズメほどの小さな鳥で、羽色は写真のように大変にカラフルで美しい。江戸時代から輸入されていたが、1980年代から関東以南で急速に個体数が増加し九州でも生息している。近県では茨城県筑波山で繁殖しておりよく見ることができる。

県内では秩父山系で繁殖していたが、近年ニホンジカの食害によりスズタケがなくなってしまったため観察数が減少している。結果的に、冬期の低地での観察記録も減少しているようだ。



## 7 コウライキジ *Phasianus colchicus karpowi* その他の総合対策外来種



### 種の概要

平成 28 年にさいたま市北区で 1 羽が観察された。

本種の実産地は、アジア東部で江戸時代に放鳥されていたとされる。首に白い輪があり、在来のにホンキジに比べて明るい色合いの体色である。

1919 年に農林省により飼育が始まり、狩猟目的として 1924 年以降毎年のように全国各地に放鳥されていた。にホンキジとは亜種関係にあるため容易に交雑してしまうため、純粋なにホンキジは存在していないのでは、と危惧されている。

## 8 コジュケイ *Bambusicola thoracicus*



### 種の概要

平成 28 年に 2 羽、平成 29 年に 4 羽、平成 30 年に 3 羽が観察された。

本種の実産地は中国南部である。大正時代に飼育鳥として輸入したものが放し飼育、あるいは逃げ出しにより拡がっていき、その後、狩猟対象として養殖されて各地に放鳥されたものが増えてきたようだ。

驚くほど大きな声で「チョットコイ、チョットコイ」と聞こえるように鳴くが、藪や茂みを好むので、姿を見るのはかなり難しい鳥である。

## 9 シラコバト *Streptopelia decaocto*



### 種の概要

平成 29 年度に吉川市で 2 羽観察された。

本種の実産地は中央アジアの乾燥地帯であり、徳川時代に御鷹場へ狩猟対象として導入されたものとされている。このため、日本鳥学会「日本鳥類目録改訂第 7 版」では外来種扱いとなった。

埼玉県民の鳥として、コバトンのモデルになっているが、実際にシラコバトを見た人は多くない。本種の実産地が埼玉県東部に偏っていることも原因である。

## 10 ワカケホンセイインコ *Psittacula krameri manillensis* その他の総合対策外来種

### 種の概要

平成 29 年 5 月に、朝霞市で 1 羽が観察された。

アフリカから南アジアにかけて生息するやや大型のインコで全身黄緑色である。雄は名前のように喉から首にかけて黒い帯がある。ペットとして輸入されたものが、逃げだしたと考えられており、1970 年前後に、東京都に住み着くようになった。夕方群れになって、東京工業大学の大岡山キャンパスにねぐら入りことがよく知られている。徐々に生息範囲を広げているようだ。樹洞に営巣することから、競合する在来種への影響が懸念されている。原産地では農作物に被害を与えるとして嫌われているようだ。

11 カミツキガメ(カミツキガメ科) *Chelydra serpentine* 特定外来生物・緊急対策外来種



カミツキガメ分布図



分布状況

30年度は報告がなかった。  
28年～30年度、3年間の報告件数は、2市（さいたま市、所沢市）2件になる。

環境別報告件数	記号	件数	%
雑木林	A	0	0
河川敷	B	2	100
水田・休耕田・畑	C	0	0
市街地	D	0	0
合計		2	100

環境別報告件数

2件、河川敷からの報告があった。

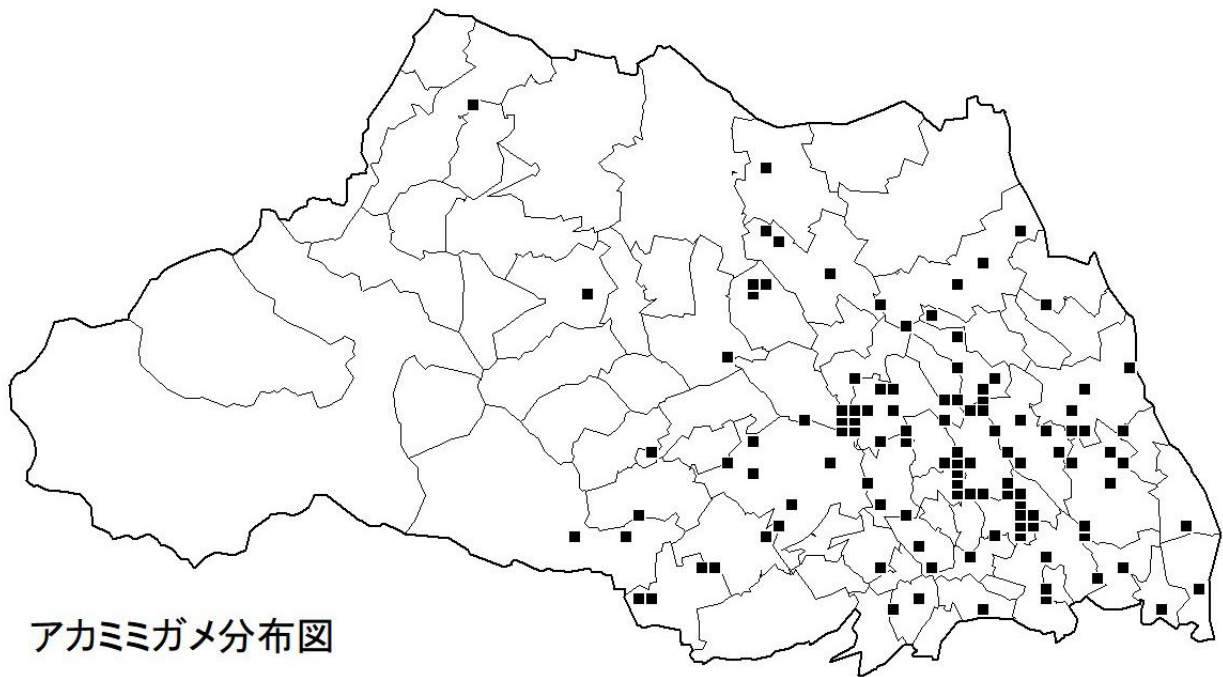
種の概要

カナダからエクアドルにかけてのアメリカ大陸原産で、ペット用に輸入されたものが捨てられ野生化したとみられる。甲長約 50 センチ、体重約 35 キロまで成長する大型種である。背甲には3本の隆条があり、後端はぎざぎざ、腹甲は小さい。四肢は強靱で頭部が大きい。尾は長く雄の方がより長くなる。かまれた場合、大けがの恐れがある。緩やかな流れや止水性の水生植物が繁茂する深い水場を特に好む。雑食性で幼体は肉食傾向が強い。

埼玉県では2006年に初めて県東部の水路で発見される。その後、さいたまや越谷、春日部、行田市など荒川・利根川水系などで毎年数頭から20頭近くの個体が捕獲されている。2015年には川越市の新河岸川で目撃情報があり、本調査での所沢市の報告例と合わせて県西部にも分布を広げていると思われる。



12 アカミミガメ(ヌマガメ科) *Trachemys scripta* 緊急対策外来種



アカミミガメ分布図



分布状況

30年度は11市町、31件の報告があった。

28年度～30年度、3年間の報告件数は30市町168件になる。秩父などの山間部や北部からの報告が少なかった。利根川や荒川水系の河川敷を中心に県内各地から多くの報告があった。特に荒川水系のさいたま、川口市からの報告は64件と4割を占めた。

環境別報告件数	記号	件数	%
雑木林	A	6	3.6
河川敷	B	124	73.8
水田・休耕地・畑	C	21	12.5
市街地	D	17	10.1
合計		168	100

環境別報告件数

30年度の報告を環境別にみると、A雑木林3件、B河川敷17件、C水田等7件、D市街地4件であった。

3年間の環境別報告件数を見ると、河川敷が7割を占め圧倒的に多かった。公園の池、用水路など

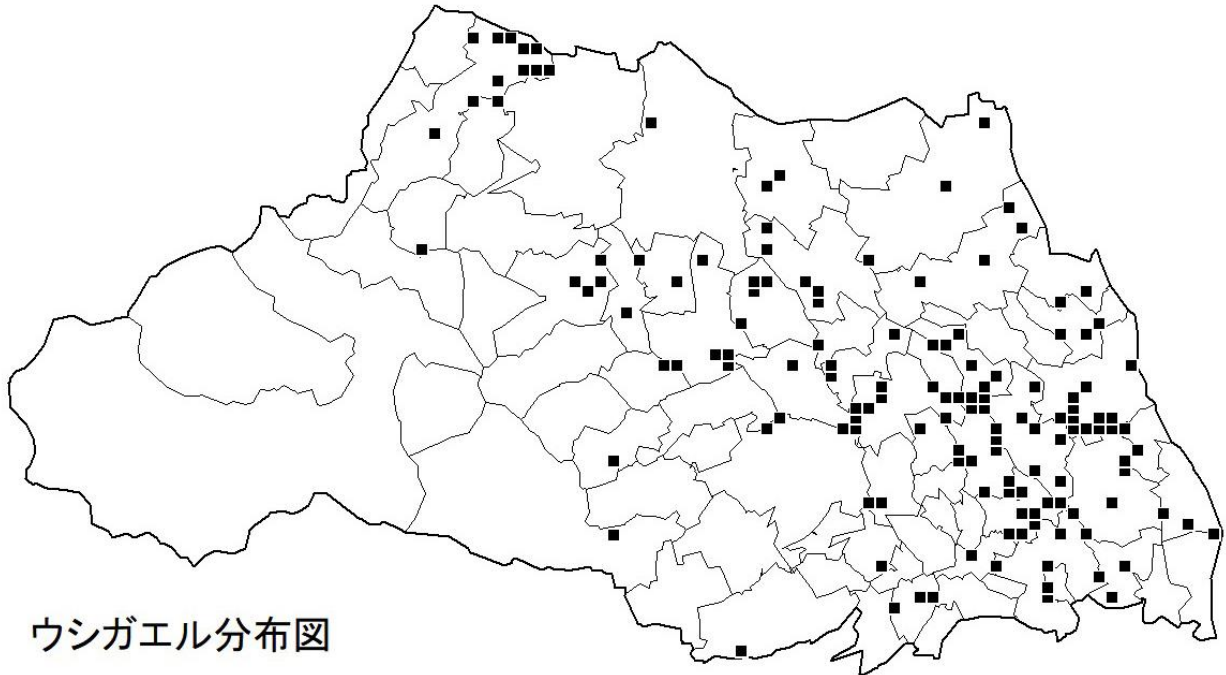
で目視されることが最も多かった。次いで水田・休耕地・畑と市街地からの報告が多かった。雑木林からは6件の報告があったが、樹林地ではなく神社の池など水辺での目撃情報であった。

種の概要

アメリカ大陸原産の外来種。幼体がミドリガメという名称でペットとして大量に販売されてきた。大きくなった成体が野外に捨てられ自然繁殖をしている。「外来種ハンドブック」(日本生態学会：2002)によると、1950年代後半から幼体が輸入され、60年代後半から野外で野生化した個体が見つかるようになった。目の後方に鮮やかな赤い線が入ることで、これを耳に見立ててアカミミガメと呼ばれる。底質が柔らかく水生植物が繁茂し水深のある流れの緩やかな流水域や止水域を好む。幼体は肉食傾向が強いが、成体では雑食となり何でも食べる。在来の淡水ガメとの競合や餌となる生物への影響が懸念されている。



13 ウシガエル(アカガエル科) *Rana catesbeiana* 特定外来生物・緊急対策外来種



ウシガエル分布図



**分布状況**

30年度は20市町、35件の報告があった。

28年～30年度、3年間の報告件数は、36市町191件になる。県西部の山間部を除いて県内から幅広く報告があった。特に本庄、春日部、越谷市など利根川水系やさいたま市、川口市などの荒川水系の県南や県東部の平野部からの報告が多かった。

**環境別報告件数**

環境別報告件数	記号	件数	%
雑木林	A	12	6.3
河川敷	B	106	55.5
水田・休耕田・畑	C	59	30.9
市街地	D	14	7.3
合計		191	100

30年度の報告を環境別にみると、A雑木林3件、B河川敷12件、C水田等16件、D市街地4件であった。

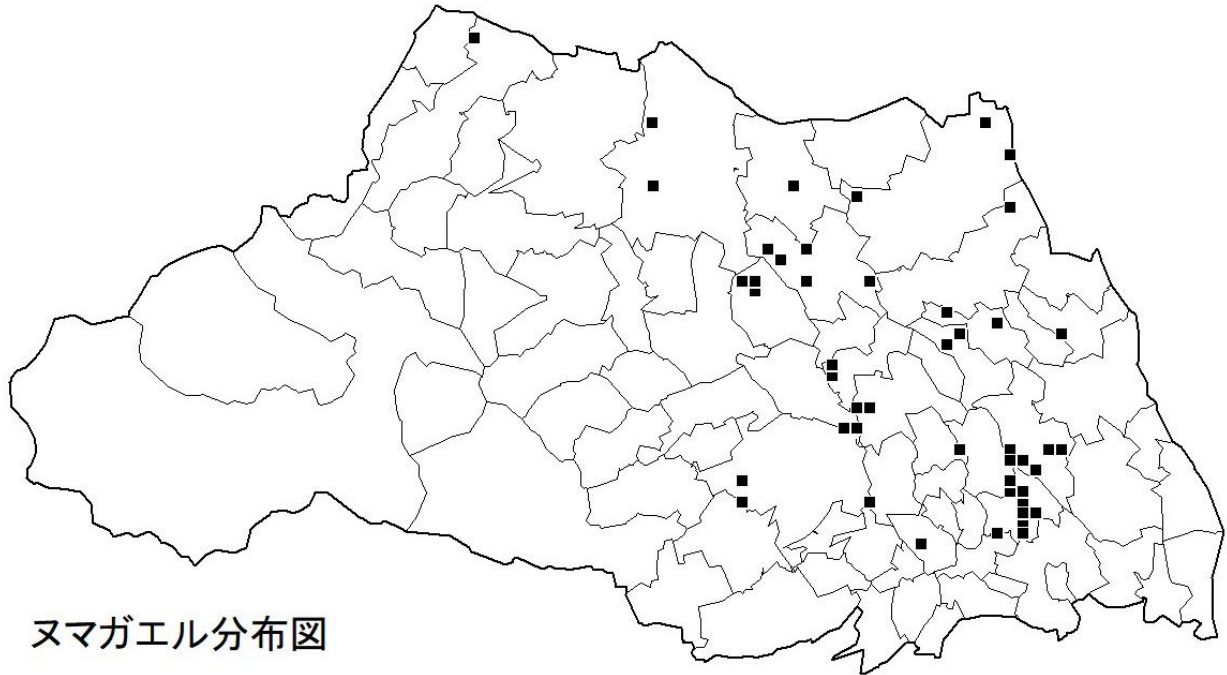
3年間の環境別報告件数を見ると、河川敷からの報告がほぼ半数を占め最も多かった。次いで水田・

休耕田・畑からの報告が多かった。雑木林、市街地からの報告がすくなくならずあったが、両者とも池などの水辺での目撃報告が多かった。

**種の概要**

北アメリカ産の特定外来種。食用を目的とした養殖のため導入されたが、放逐され、全国の多くの地域で繁殖している。県内では最大のカエルであり、ウシに似た鳴き声特徴的である。ほとんどのオタマジャクシが越冬してから成体になる。食性は肉食で昆虫やザリガニの他、小型の哺乳類や鳥類、爬虫類、魚類までも捕食するが、在来の生物、カエル類への影響が問題となっている。「埼玉県動物誌」(1978)によると、埼玉県に入ってきたのは1936年頃で、川口市や浦和市が最初の生息地のようなのである。2015年3月に生態系被害防止外来種リストに選定され、日本国内では飼育や販売が原則禁止されたため、本種が流通することはなくなった。

14 ヌマガエル(ヌマガエル科) *Fejervarya kawamurai* 重点対策外来種



ヌマガエル分布図



分布状況

30年度は10市町、18件の報告があった。  
 28年～30年度、3年間の報告件数は73件になる。県北から県央、県南にかけての利根川流域や荒川流域からの報告があり、この流域で定着していると思われる。特に利根川水系では30年度に本庄市、行田市、戸田市などで新たに報告があった。また、川越市の入間川河川敷からの報告も引き続いてあり、分布域を広げていることが伺われる。

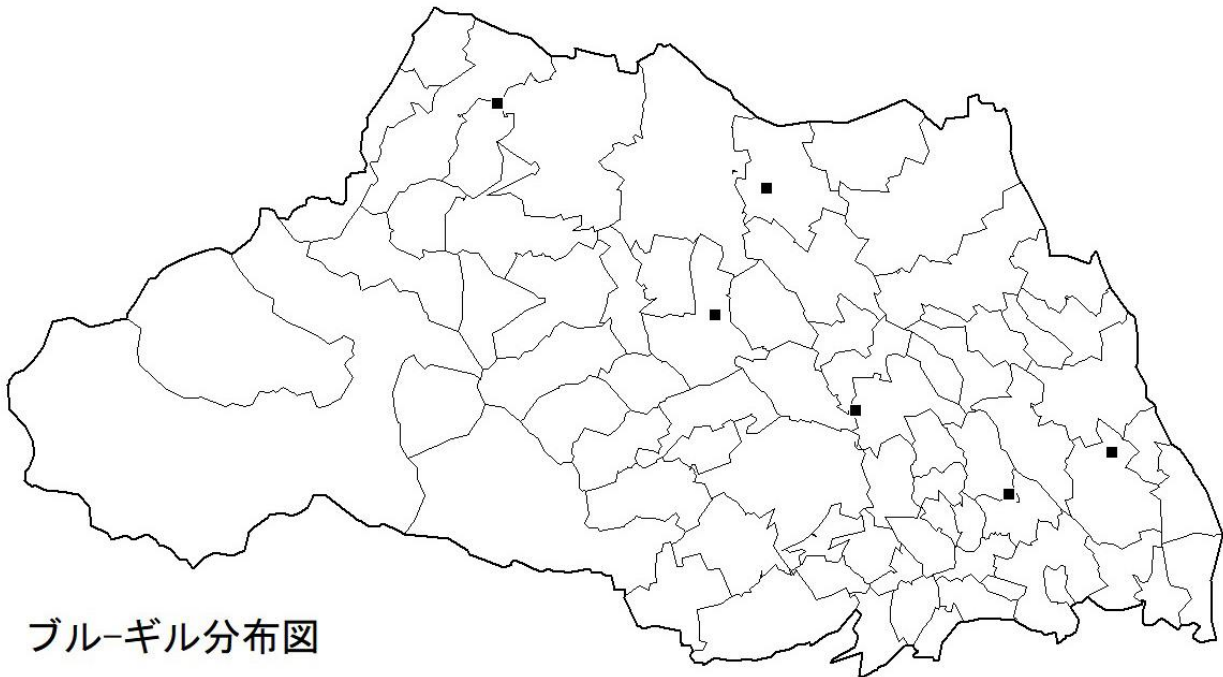
環境別報告件数

環境別報告件数	記号	件数	%
雑木林	A	0	0
河川敷	B	15	20.5
水田・休耕田・畑	C	57	78.1
市街地	D	1	1.4
合計		73	100

30年度の報告を環境別にみると、B河川敷3件、C水田等15件で、A雑木林とD市街地からは報告がなかった。3年間の環境別報告件数を見ると、水田・休耕田・畑からの報告が8割を占め最も多かった。次いで河川敷からの報告が多かった。生息地が田んぼや湿地、河川敷などの水たまりであることを反映している。雑木林からの報告はなかったが市街地からの報告が1件あった。これも利根川水系の河川敷に近い公園の沼地で水辺の環境である。

種の概要

南方系のカエルで日本、中国、台湾に分布する。日本では本州中部（静岡県）以西、四国、九州、南西諸島に分布が知られている。体長3～5cmの中型のカエルで水田や湿地、河川などの水辺周辺に生息している。オタマジャクシ(幼生)は高温に強い耐性を備えていて40℃を超えるような夏の水田でも生き残り成長することができる。関東地方では1990年代に入って神奈川、千葉、栃木、群馬などで確認された。関東地方における分布拡大は、温暖化が一因である可能性が指摘されている。埼玉県では2003年に加須市（利根川水系）で、2004年には寄居町（荒川水系）で確認され、荒川、利根川、江戸川水系沿いに分布を拡大しているとされる。



ブルーギル分布図



**分布状況**

30年度は1地点から1件の報告があった。  
 28年度～30年度の3年間の報告件数は7件、分布図のとおり6地点からのものである。28年度の上尾市・行田市・美里町、29年度のさいたま市・東松山市に今年度、越谷市からの報告が加わった。ブラックバス類3種の中では最も多い報告件数である。3年間に確認された個体数は136匹になる。

環境別報告件数	記号	件数	%
雑木林	A	0	0
河川敷	B	3	42.9
水田・休耕田・畑	C	3	42.9
市街地	D	1	14.3
合計		7	100

**環境別報告件数**

30年度の確認は、新方川のビオトープからの1件である。

3年間の報告を環境別にみると、確認地はB河川敷3件、C水田等3件、D市街地1件となる。

このうち2件は河川で、残り5件は公園の池やため池のようである。釣りを目的とした止水域への人為的な放流が考えられる。バス釣りブームによって、ブラックバスの餌と称して各地の湖沼に放流されたものが繁殖し全国に分布を広げることとなった、と言われることとも符合する。

**種の概要**

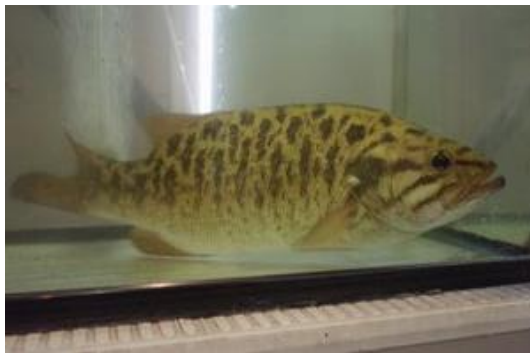
スズキ目サンフィッシュ科に属する淡水魚。原産地は北アメリカ。池や湖など水の流れがあまりない水草の茂る環境に好んで生息する。雑食性で、水草などの植物類から貝類、エビ類、小魚、水生昆虫類など何でも食べるため、水辺環境の生態系に多大な影響を及ぼす懸念がある。埼玉動物誌(1978年)ではブラックバスという総称で扱われており種の特定はできないが、下久保ダムに放流され、最近増殖してダムの下流でもみられるようになったとある。移入の経緯から見ても全国的に分布が広まっている現状では、県内の湖沼等にも多数生息していると推定される。





コクチバス分布図

**分布状況**



30年度は1地点から1件の報告があった。

28年度～30年度の3年間の報告件数は、本件のみである。「荒川自然－荒川総合調査報告書1－(1987年)」には、荒川水系ではサンフィッシュ科2種(オオクチバスとブルーギル)が記されているが、本種の記載はない。環境省・日本の外来種対策・特定外来生物の解説の「平成21年までに個体が確認された地点図」には埼玉県は複数の地点が記されている。写真は同解説から複写したものである。

環境別報告件数	記号	件数	%
雑木林	A	0	0
河川敷	B	0	0
水田・休耕田・畑	C	1	100
市街地	D	0	0
合計		1	100

**環境別報告件数**

30年度の確認は、川口市行衛からの1件である。同地は見沼田んぼの一部であり、南東に赤堀用水路があることから、同地点での確認と思われる。

**種の概要**

スズキ目サンフィッシュ科に属する淡水魚。原産地は北アメリカ。全長30～50cm。オオクチバスに似るが、口は小さくて上あごの後端が眼の中央下まで達しない。国内への侵入は遊漁のための密放流と考えられている。湖沼や河川の中下流域に生息し、低水温に対する耐性が強く、また流水域にも適応できる。捕食や競争を通じ、魚類や甲殻類、水生昆虫など、様々な在来生物に直接的または間接的な影響を及ぼすことから特定外来生物に指定されている。



オオクチバス分布図



**分布状況**

30年度は確認の報告がなかった。  
 28年度～30年度の3年間の報告件数は28年度の2件、分布図のとおり2地点からのものである。確認地は志木市と春日部市である。「荒川自然－荒川総合調査報告書1－(1987年)」には、吉見町・天神沼、桶川市・川田谷沼で確認され、環境省・日本の外来種対策・特定外来生物の解説の「平成21年までに個体が確認された地点図」には、埼玉県多くの地点が記されている。

環境別報告件数	記号	件数	%
雑木林	A	0	0
河川敷	B	2	100
水田・休耕田・畑	C	0	0
市街地	D	0	0
<b>合計</b>		<b>2</b>	<b>100</b>

**環境別報告件数**

確認された2地点は、いずれも河川であった。報告には、志木市は柳瀬川、春日部市は古利根川とある。ブルーギルが公園の池やため池で確認されていることから、止水域を好むといわれる本種がブルーギルと同程度の報告がないのが不思議である。文献

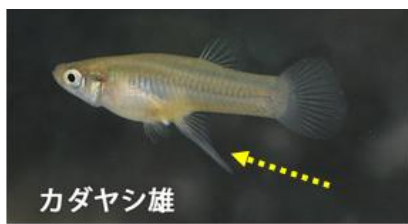
などから県内の湖沼や河川に広く分布していることがうかがえるが、こうした調査で魚類を確認することは難しい面がある。新たな調査の必要を感じる。

**種の概要**

スズキ目サンフィッシュ科に属する淡水魚。原産地は北アメリカ。食魚性が強いので在来魚を全滅させる恐れがあること、また魚類に限らず、その旺盛な食欲から水生昆虫などの生態に多大な影響を及ぼすことが懸念され、特定外来生物に指定されている。1925年にアメリカから箱根芦ノ湖に移入されたのが最初。食用にもされたが、何と云っても引きの強いフィッシング対象種として人気を博し、その後あっという間に全国に広まり現在に至っている。



カダヤシ分布図



**分布状況**

30年度は3市7地点から7件の報告があった。  
 28年度～30年度の3年間の報告件数は23件、14地点からのものである。確認数が最も多いのが川口市で9件、次いでさいたま市8件、草加市3件、志木市2件、加須市1件であった。  
 3年間に確認された個体数は636匹。このうち100以上と報告があったのは4件、2地点からのものである。  
 埼玉県動物誌(1978年)にはタップミノーとして記され、県内では戸田市、川口市、蕨市、浦和市等周辺の水路、池沼などに生息しているとある。

環境別報告件数	記号	件数	%
雑木林	A	0	0
河川敷	B	16	69.6
水田・休耕田・畑	C	5	21.7
市街地	D	2	8.7
<b>合計</b>		<b>23</b>	<b>100</b>

**環境別報告件数**

30年度の確認は7件のうち、B河川敷5件、C水田等1件、D市街地1件であった。  
 3年間の報告を環境別にみると、確認地はB河川敷16件、C水田等5件、D市街地2件となる。個体数100匹以上を確認した環境については、いずれもB河川敷と報告があるが、地理的には市街地の小河川と思われる。

**種の概要**

原産地は北アメリカ～メキシコ北部。1916年に台湾経由で持ち込まれたのが最初。以降、日本脳炎を媒介するアカイエカ対策として放流され、広く生息するようになった。雑食性であるが動物食を好み、自種を含め他の魚の卵や稚魚を捕食する。水槽でメダカとともに飼育すると、メダカのひれを食いちぎることが知られており、自然界で同所的に存在する場所ではメダカに対する捕食圧がかかると考えられている。荒川自然－荒川総合調査報告書1－(1987年)では、熊谷市付近を上限としてその下流に分布するメダカは県の南部水域では殆ど見られなくなったとし、その原因の一つにカダヤシの増殖をあげている。雌雄の区別点は写真のように尻ビレがポイントである。



## 19 カムルチー(タイワンドジョウ科) *Channa argus*

### 種の概要

28年度～30年度の3年間に2件(28年度1件、29年度1件)確認の報告があった。

本種はこれまで外来生物法で要注意外来種とされていたが、平成27年3月の法改正による新たな「生態系被害防止外来種リスト」からは外されている。原産地は黒竜江水系から長江周辺までの中国大陆と朝鮮半島。「ライギョ」あるいは「チョウセンナマズ」とも呼ばれている。全長70～80cmに達する大型の肉食魚。小型の魚、カエル、エビ、カニなどを好んで食べ、水鳥のひななども丸呑みされる。国内には1923年頃、観賞用として奈良県に持ち込まれたのが最初。繁殖力が強く、空気中の酸素を直接呼吸することもできるため汚れた水域などでもすめ、「1950～60年代までに本州、四国、九州の各地の池沼に生息するようになった」と「外来種ハンドブック(2003年/日本生態学会)」にある。漁業被害を防ぐため北海道のほか5県では漁業調整規則で移植を禁止されている。

## 20 グッピー(カダヤシ科) *Poecilia reticulata* その他の総合対策外来種

### 種の概要

28年度～30年度の3年間に1件(28年度)確認の報告があった。

本種は「我が国の生態系等に被害を及ぼすおそれのある外来種リスト」で「総合的に対策が必要な外来種」の区分の中の「その他の総合対策外来種」として記されている。原産地はアマゾン川北部等。河口付近の汽水域に生息する、いわゆる熱帯魚である。雑食性で、藻類や小動物などのほか家庭排水に含まれる有機物も食べる。「わが国では1955年頃から愛好家が増え、1965年頃には爆発的なブームとなり、シンガポールから養殖グッピーが大量に輸入された」と「外来種ハンドブック(2003年/日本生態学会)」にある。観賞用として入り、放逐され、冬季の水温が18℃以下に下がらない高温の緩流域に定着。国内では温泉地や工業排水の流れ込む河川や水路、水質汚染への耐性が極めて強く、市街地の下水溝にも生息しているといわれている。

## 21 コイ(コイ科) *Cyprinus carpio*

### 種の概要

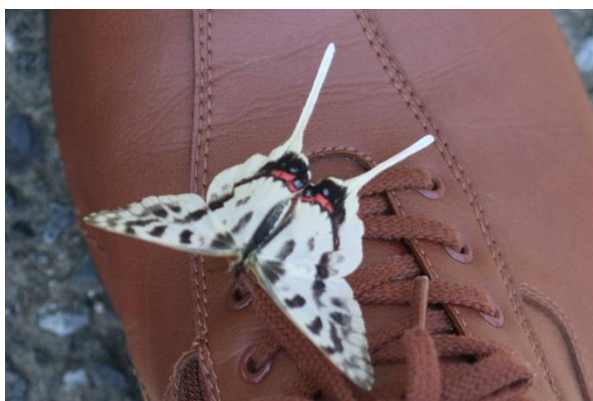
28年度～30年度の3年間に1件(30年度)確認の報告があった。

本種は、海外では淡水生物群集全体への影響があるとして、国際自然保護連合の種の保全委員会が発表した「世界の侵略的外来種ワースト100」のリストの魚類の区分の中にオオクチバスやカダヤシとともに記されている。原産地は東欧(黒海・カスピ海・アラル海)～東アジアのユーラシア大陸。国内では、本州・四国・九州に広く自然分布すると考えられているが、詳細は不明。底生動物を中心とする雑食性で、貝類・ユスリカ幼虫・ゴカイ類・付着珪藻・水草などを食べる。国内では古くから移植が行われ、明治以降には外国産のコイも各地に放流されたため、広い範囲で在来集団への遺伝的攪乱が進んでいると考えられている。

22 ホソオチョウ(アゲハチョウ科) *Seriginus japonica* 重点対策外来種



ホソオチョウ分布図



**分布状況**

30年度は2市2地点から2件の報告があった。

28年度～30年度の3年間の報告件数は7件、県西部地域6地点からのものである。28年度の嵐山町・小川町、29年度の飯能市・坂戸市に今年度、所沢市と毛呂山町からの報告が加わった。

3年間に確認された個体数は220頭。発生が繰り返されている可能性がある、100頭以上を確認と報告があったのは坂戸市と所沢市であった。

**環境別報告件数**

環境別報告件数	記号	件数	%
雑木林	A	3	42.9
河川敷	B	1	14.3
水田・休耕地・畑	C	2	28.6
市街地	D	1	14.3
合計		7	100

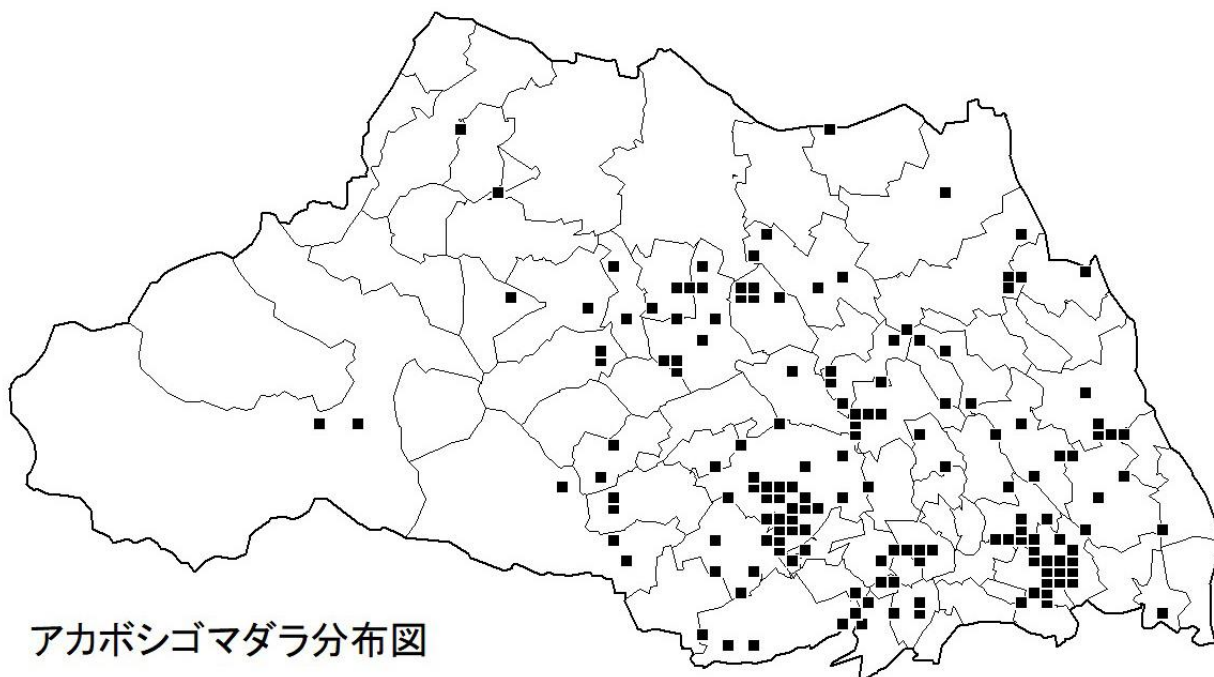
30年度の確認2件は、A雑木林1件とC水田等1件であった。

3年間の報告を環境別にみると、確認地はA雑木林3件、B河川敷2件、C水田等2件、D市街地1件となる。個体数100頭以上を確認した2地点の環

境は、B河川敷とC水田等であった。本種は食草（ウマノスズクサ）に強く依存し生息していることから食草が生える堤防付近や耕作地の近くの草地で発生し、確認されたと考えられる。

**種の概要**

原産地は中国～朝鮮半島。アゲハチョウよりかなり小さく、国内に似た種はいない。放蝶による侵入と考えられている。1978年に東京都で確認されてから、現在は東北から九州に至る各地で記録されている。一時的な発生の場合もあるが、県内では、近年、狭山丘陵や奥武蔵、越生町など県西部地域で度々確認されている。移動性が低く、農業害虫ではないことから駆除されることはなく特定の地域で発生を繰り返し、付近に拡大している可能性が高い。食草がジャコウアゲハと同じであることから、競合が懸念されている。



アカボシゴマダラ分布図



#### 分布状況

30年度は22市町61地点から69件の報告があった。28年度～30年度の3年間の報告件数は214件、40市町村、156地点からのものである。確認数が最も多いのが川越市で44件、次いで川口市29件、さいたま市21件であった。分布図のとおり県北部と山地帯での確認は少ないが、県内に広く分布していることがみてとれる。確認が少ない地域は同地が調査されていないためと思われる。本種は環境への適応性が高く、食草のエノキが、野鳥によって種子散布され、どの環境にも生育していることが分布の拡大につながっているもの

のと考えられる。

環境別報告件数	記号	件数	%
雑木林	A	80	37.4
河川敷	B	41	19.2
水田・休耕田・畑	C	40	18.7
市街地	D	53	24.8
合計		214	100.1

#### 環境別報告件数

30年度の確認69件は、A雑木林18件・B河川敷12件・C水田等15件・D市街地24件であった。

本種が県内に広く分布していることは環境別の集計からもうかがい知ることができる。食草があれば環境を問わず生息するようである。3年間の報告

では、A雑木林80件、B河川敷41件、C水田等40件、D市街地53件となった。

#### 種の概要

本種は中国産亜種(大陸産亜種)で、1998年以降、国内で分布を拡大している。在来種は奄美大島、徳之島、喜界島に分布。食草はエノキで、成虫は年3回程度発生。急激な増加によってもともと類似環境に生息するゴマダラチョウと生態的に競合するのではないかと懸念されている。後翅外縁に赤い斑紋が出るのが特徴であるが、春型では著しく白化した個体も出現することもあり、ゴマダラチョウと紛らわしい。観察会を開催する団体からは普通に見られるようになったとの声があり、県内全域で拡大から定着そしてまん延期に入った可能性が考えられる。

24 クビアカツヤカミキリ(カミキリムシ科) *Aromia bungii* 特定外来生物、その他の総合対策外来種



クビアカツヤカミキリ分布図

**分布状況**

30年度は1地点から1件の報告があった。

28年度～30年度の3年間の報告件数は6件、草加市3地点と深谷市1地点からのものである。

なお、本種の調査については、ここでの調査法とは異なる形でもデータを集めた。結果は動物編34ページに記載した。



**環境別報告件数**

30年度の確認1件はD市街地からのもの。

3年間の報告では、A雑木林1件、D市街地5件となった。本種が食入・加害するサクラやモモ、ウメ、ザクロ等といった樹種は植栽により市街地でも容易に見られる。そうした環境が調査結果に現れたと思われる。

環境別報告件数	記号	件数	%
雑木林	A	1	16.7
河川敷	B	0	0
水田・休耕田・畑	C	0	0
市街地	D	5	83.3
合計		6	100

**種の概要**

原産地は中国、モンゴル、朝鮮半島等。成虫の体長は約2.5～4センチ。国内での発生個体は首の部分(前胸背板部)が赤く、他の種との見分けは比較的容易である。幼虫が生木に入り、樹木内で2～3年で成長し蛹となり、夏に成虫になり樹木の外に出ると考えられる。国内では2012年の愛知県での発見が最初といわれ、2013年には埼玉県草加市で見つかり、以降他県でも発見され、果樹園内での広範囲な被害もあり防除が試みられている。今後も新たな発生が続くと思われ、発生地においては、早急に関係地域自治体と連携し、駆除対策を講じ、同時にモニタリング調査を行うべきであろう。

国内での生態については、確認数などが少なく知見の集積が必要といわれているが、被害木を衰弱、枯死させる重要害虫で、発見次第、捕殺することが必要である。



## 25 アオマツムシ(マツムシ科) *Calyptoryqus hibinonis*

28年度～30年度の3年間に2件(30年度)確認の報告があった。

本種は、普通の昆虫図鑑にもでている、関東ではよく知られた外来種である。原産地は中国南部。1898年、東京での発見が最初といわれ、街路樹や庭木などの苗木に卵がついて輸入されたと考えられている。成虫は8月頃から12月まで見られ、夜間活動型の昆虫であるが、盛夏には昼間から「リーー、リーー、リーー」と騒がしく鳴く。樹上性の種で競合種がなく、捕食者も少ないため、北海道を除く国内に生息、定着している。1980年頃からカキやナシの害虫として注目され、1985年には「植物防疫病害虫情報(農水省)」に葉や果実を加害するとし、防除法が記されている。

## 26 アメリカシロヒトリ(ヒトリガ科) *Hyphantria cunea*

28年度～30年度の3年間に11件(29年度2件、30年度9件)確認の報告があった。

本種は、日本生態学会が作成した「日本の侵略的外来種ワースト100」の昆虫類の区分の中に記されている。原産地は北アメリカ。国内への侵入経路などは明らかでない。戦後、米軍の物資に付着していたのでは、とも言われている。幼虫は600種にも及ぶ樹種を加害し、在来生物への影響も心配されている。これまで分布は本州から九州の一部・小笠原とされてきたが、近年、北海道でも発生が確認されている。なお、本種を含むヒトリガ科は「植物防疫法」で検疫有害動物と扱われている。

## 27 キマダラカメムシ(カメムシ科) *Erthesina fullo*

28年度～30年度の3年間に1件(30年度)確認の報告があった。

本種は、近年急速に分布を広げ関東地方でも既に定着していると推測されている外来カメムシである。原産地はマカオ、ルソン、ベトナム辺りと考えられている。長崎のオランダ商館付き医師により1783年に新種として記録され、20世紀末までに九州のほぼ全域、その後分布を拡大、現在に至っている。サクラの幹でよく見られ、越冬のため建物にも侵入する。

## 28 ブタクサハムシ(ハムシ科) *Ophraella communa*

28年度～30年度の3年間に1件(30年度)確認の報告があった。

本種は、その名のとおり外来植物であるブタクサやオオブタクサを好んで食べる外来のハムシである。原産地は北アメリカ。1996年、千葉県で同植物を食べているハムシが発見され本名に命名された。国内への侵入は定かではなく、輸入用の梱包材や干し草に紛れて入ったのではないかとされている。以降急速に分布を広げ2001年には国内38県で発見されている。外来植物を食べることから生物的防除として注目されていたが、ヒマワリ類もたべることが分かり注意すべき種とされている。

## 29 ヤサイゾウムシ(ゾウムシ科) *Listroderes costirostris*

28年度～30年度の3年間に5件、確認の報告があった。いずれも30年度の報告である。

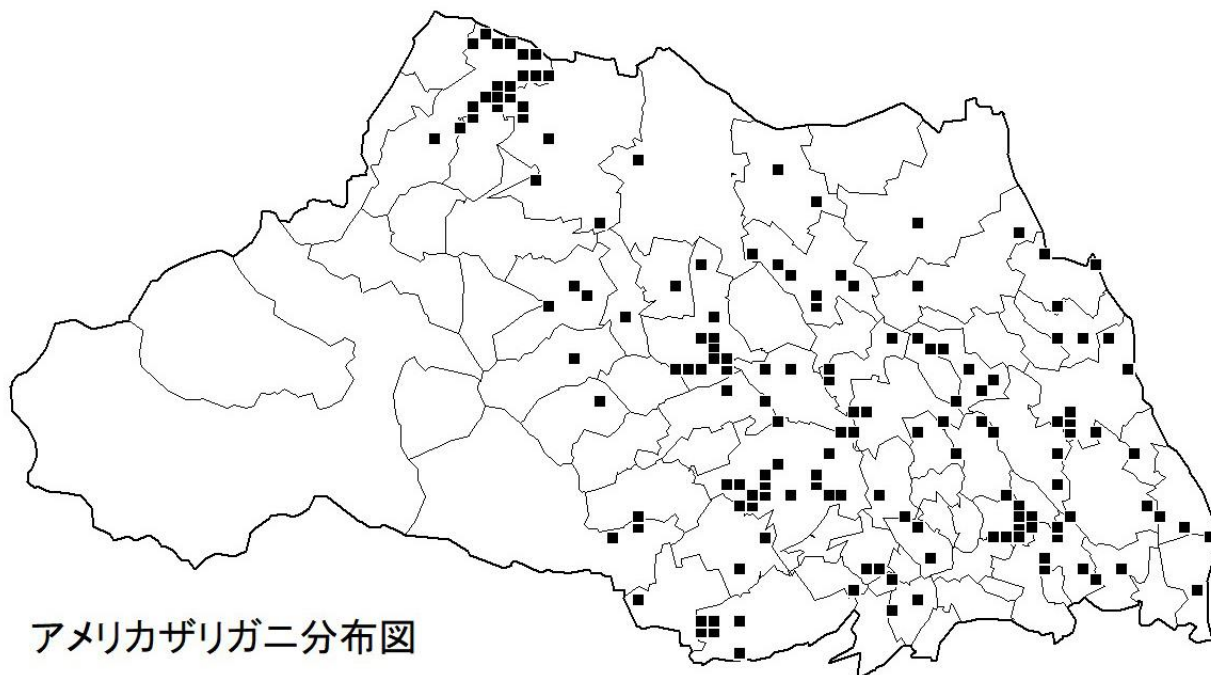
本種は、野菜の害虫として知られる外来種で、国内への侵入経路などは不明。原産地はブラジルとされている。国内では、1942年、岡山県での発見が初記録。戦後に大発生し薬剤駆除がされ被害は激減したが、その後、関東地方を中心に九州から東北地方へ分布を広げていると言われている。低温に比較的強く、ハウス栽培の普及、温暖化といった環境の変化から分布の北上が懸念されている。

## 30 ヨコヅナサシガメ(サシガメ科) *Aromia bungii*

28年度～30年度の3年間に4件、確認の報告があった。いずれも28年度の報告である。

本種は、関東地方では近年普通に見られる外来カメムシである。原産地はインド、東南アジア、中国。国内への侵入経路などは不明。1930年代に九州で記録され、1990年代には関東地方に入ったといわれている。成虫はケヤキやサクラなどニレ科やバラ科の木でよく見かける。毛虫などの昆虫類などを刺して体液を吸収する。寒冷地にも適応するため分布の拡大とともに在来の虫たちへの影響が懸念されている。人を刺すこともある。

31 アメリカザリガニ(アメリカザリガニ科) *Procambarus clarkia* 緊急対策外来種



アメリカザリガニ分布図



**分布状況**

30年度は21市町50地点から68件の報告があった。28年度～30年度の3年間の報告件数は221件、39市町、153地点からのものである。確認数が最も多いのがさいたま市で33件、次いで川越市28件、川口市14件であった。分布図のとおり秩父市や皆野町、東秩父村といった山地帯をもつ市町村での確認はなく、台地・丘陵から低地帯まで広く分布していることがみてとれる。埼玉動物誌(1978年)では、流れ

の速い水温の低い清水には生息しない、山間部の沢や谷以外、全域に分布するきわめて普通種であるとしている。

**環境別報告件数**

環境別報告件数	記号	件数	%
雑木林	A	8	3.6
河川敷	B	94	42.5
水田・休耕田・畑	C	104	47.1
市街地	D	15	6.8
合計		221	100

30年度の確認68件は、A雑木林2件・B河川敷29件・C水田等34件・D市街地3件であった。

3年間の確認を集計しても環境割合は左表のとおり同程度であった。本種は、えらで空気から直接呼吸ができ、乾期・冷期には弱いとされるが、冬場は枯れた水路などに穴を掘り潜み、越冬する。こうした

適応力と何でも食べる強い雑食性が様々な環境への進出を可能にしている。そうした状況をうかがわせる結果でもある。

**種の概要**

原産地は北アメリカ南部で、1927年(昭和2)に食用ガエル(ウシガエル)の繁殖用の餌として持ち込まれたのが最初、その後急速に各地に分布。県内に入ったのは1937年頃で、1940年7月の関東一帯をおそった大雨出水のため、県南部一帯のあらゆる水域でどこでも見られるようになった、と荒川自然-荒川総合調査報告書1-(1987年)にある。雑食性で小魚や水生昆虫などの生態系に影響を与えるほか、稲苗を食べたり畔に穴を開けたりして農家からは嫌われものとなっている。





スクミリンゴガイ分布図



**分布状況**

30年度は1市2地点から2件の報告があった。  
 28年度～30年度の3年間の報告件数は9件、3市(さいたま市5件・鴻巣市3件・加須市1件)、7地点からのものである。さいたま市桜区と鴻巣市での確認は確認地が隣接した地があり、個体数も多いことから、旺盛な繁殖力を考えると、早急に対策が必要であろう。



個体数を100以上確認と報告があったのは、さいたま市2地点、鴻巣市1地点、加須市1地点であった。  
 卵塊の確認は2件あった。

**環境別報告件数**

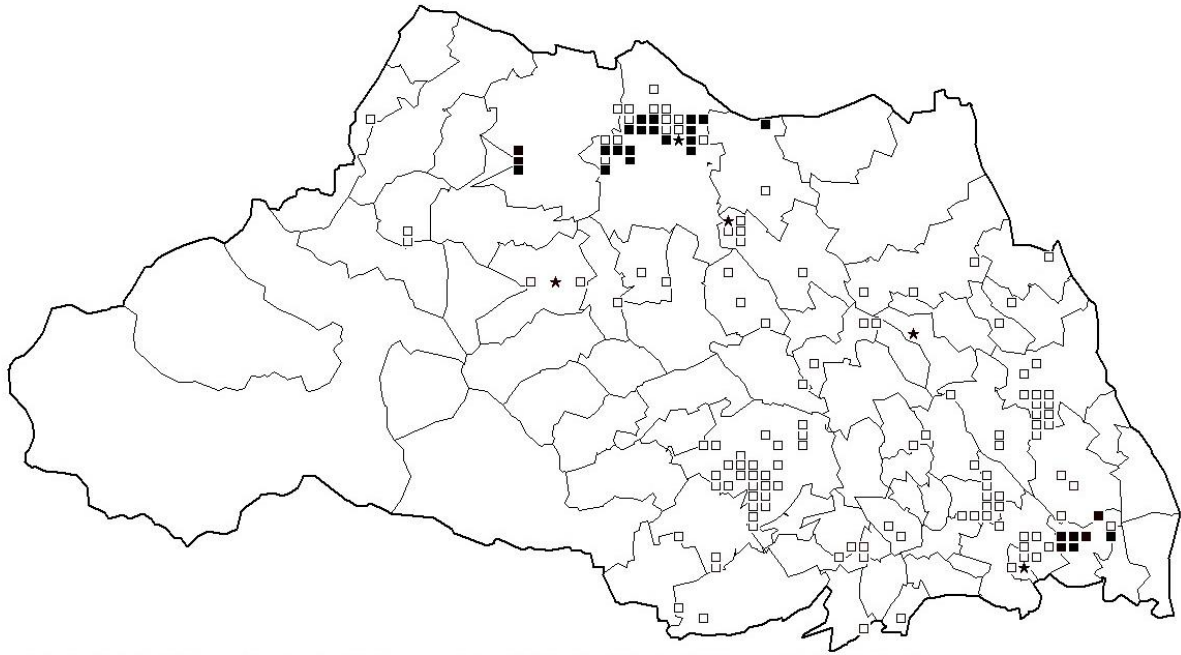
30年度の確認2件は、C水田等であった。  
 3年間の報告を環境別にみると、確認地はすべてC水田等である。本種は水田などの水辺環境に依存することから、報告もすべて水田等での確認であった。

環境別報告件数	記号	件数	%
雑木林	A	0	0
河川敷	B	0	0
水田・休耕田・畑	C	9	100
市街地	D	0	0
合計		9	100

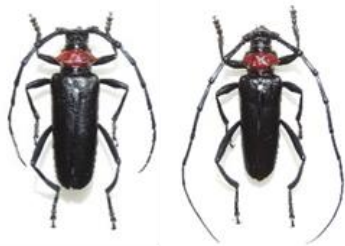
**種の概要**

原産地は南アメリカ。俗称「ジャンボタニシ」と呼ばれる大型の淡水巻貝。国内には1980年代に食用として移入され、一時期全国で盛んに養殖されたが、需要がないことから養殖が廃業になるに伴って廃棄され、野生化して現在に至っている。

南方系の種のため北日本の冬は越せず分布は広がっていないが、温暖な西日本を中心に爆発的に繁殖しており、県内でも広がりを見せ始めている。主に水田や水路に生息。初夏から秋にかけてが繁殖期で、卵は水中ではなく稲の茎や水路の壁などに鮮やかなピンク色の卵塊として産み付ける。草食性が強く、大量に発生することで農作物への食害が懸念されている。



クビアカツヤカミキリ分布図 ■は確認 □は未確認 ★は調査中



雌 触角は 雄 触角は  
体長より短い 体長より長い

環境科学国際センター提供

### はじめに

今年は埼玉県みどり自然課から、これまで実施してきた侵略的外来生物調査とは別に、クビアカツヤカミキリについての調査を依頼された。このため、各調査団体に環境科学国際センターの調査に対応する形でクビアカツヤカミキリ調査用紙を配布して、調査を依頼した。

### 種の概要

既に、動物19にて解説が掲載されているので詳細は省くが、写真のように触角の長さにより、容易に雌雄の判別ができる。

### 調査結果 (分布図には、平成 28、29 年度のモニタリング調査結果 5 件も含まれている。)

23 調査団体並びに、本NPO法人役員、和光市の有志 1 名から、287 件の調査結果が寄せられた。この結果はすべて環境科学国際センターへ送付して、同センターの調査に協力することができた。

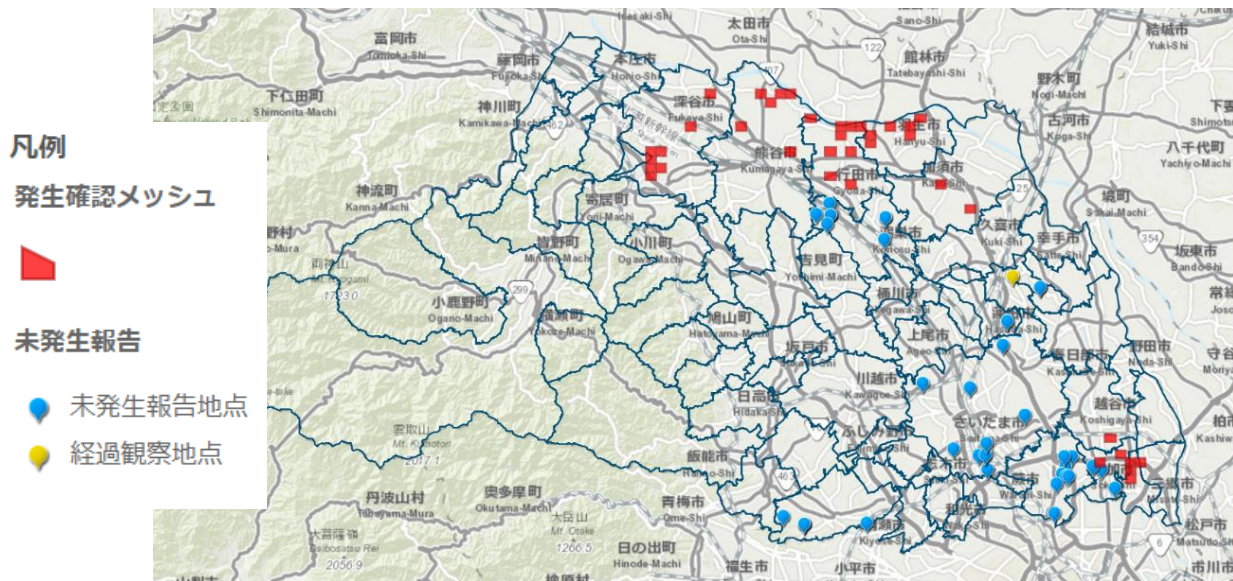
被害が確認された場所は 49 か所で、同一メッシュ中に被害が集中していることもあり、メッシュ数では 27 か所となった。なお、5 地点が疑われるとされ、継続調査中となっている。

県内での確認地点が、県北と県南東部に局在しており、当該地域ではサクラ(ソメイヨシノ)を中心にかなりの地点で被害が出ているが、ウメ、モモなども被害を受けていることがわかった。今回の調査では、熊谷在住の本NPO法人役員が精力的に調査を実施して被害状況を明らかにしたため、熊谷での被害報告数が圧倒的に多かった。その両端に位置する深谷市と行田市さらに、県南東部の草加市、越谷市においても被害は進行しているようだ。

幸いなことに、県中央部、南部、西部では疑わしい報告が数箇所あるものの、ほとんどの調査木は健全であった。



下図は、環境科学国際センターが発表したクビアカツヤカミキリ発生確認地点マップである



### 被害状況と対策

2012年に愛知県海部地域で初めて確認され、2013年に埼玉県草加市、2015年に群馬県、東京都、大阪府、徳島県の4都府県で発生したとされているが、埼玉県昆虫談話会の会報「寄せ蛾記」によると、2011年7月18日に採取したものが本種と同定されているので、この記録が日本初になると思われる。



群馬県での被害が深刻で、埼玉県にもいざれ飛来してくるのではといわれていたが、実際に利根川周辺ではかなり被害が出ており、徐々に南下する様相となっているようだ。

被害木には写真のようにネットがかけられ、羽化した個体が散逸しないようにされていた。近づいてみるとネットからあふれるようにフラス(木くず)が出ているばかりでなく、かなり高い所から出てきたと思われるフラスが周囲の土に散乱していた。右写真のように、羽化した後で逃げ出せず、ネット内で死んでいる個体もあったので、網掛けには一定の効果はあると思われる。



今後関係各自治体は連携して駆除対策を講じると共に、継続してモニタリング調査を行うべきであろう。